第120回研究会「親密さの再設計」

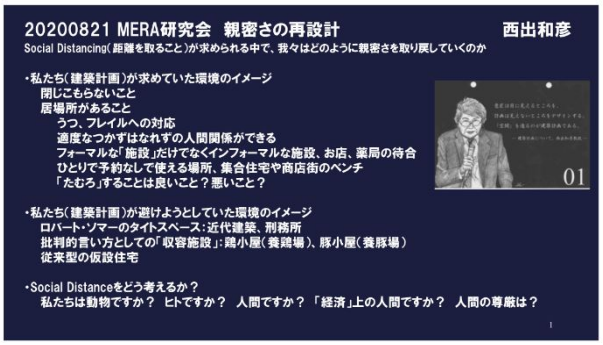
〇日時：2020年8月21日（金）14時～18時

岩佐明彦（法政大学）：こんにちは。恐れ多くも今年度より MERA の会長を仰せつかっております。コロナの影響で定例の大会もキャンセルとなってしまいましたが、何とかできることから始めていきたいということで、このたび ZOOM にて研究会を開くこととなりました。初めての取り組みで不慣れな点も多いですが、何卒ご協力をお願いします。この研究会では「親密さの再設計」というお題で西出和彦先生、南博文先生、鈴木毅先生、松本光太郎先生、広田すみれ先生の５名に対談をお願いしております。対談後は参加者全員でグループセッションも企画しておりますので、積極的な参加をお願いします。

では早速ですが、５名の先生にご講演をお願いします。自己紹介を兼ねて少しパワーポイント等でお話しいただいた上で対談にすすめます。私は司会を不慣れながらやらせていただきます。それでは、まず先頭バッターで西出先生よろしくお願いいたします。

ソーシャルディスタンスとパーソナルスペース

西出和彦／東京大学



西出和彦（東京大学）：なにぶん ZOOM を使ってというのが本当に不慣れで、どうなることやらという感じですけれどもよろしくお願いします。

昔からパーソナルスペースの研究をやっていいた立場から、「ソーシャル・ディスタンス」というちょっと怪しげな言葉を世の中一般の人たちが使うようになったことに非常に不思議な思いをしています。あちらこちらに怪しげな衝立（ついたて）が立ったりとかと、とにかく不思議な状況になってきて、私たちがいろいろ研究していて求めていたイメージが壊されていくような気がして、こういうことがスタンダードになってしまってほしくないという、そういう思いがあり、その辺の思いをお話させていただきたいと思っています。

■わたしたち（MERA）が求めてきた環境イメージ

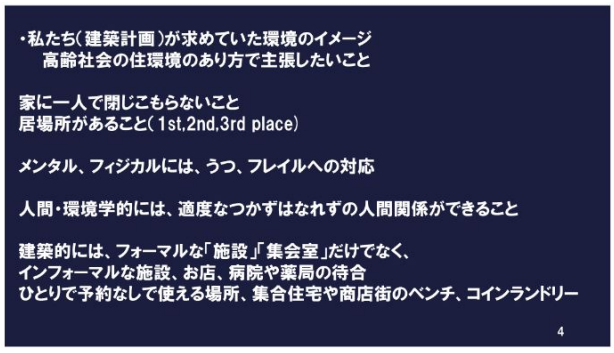
このスライドは全体の目次的な話です。まず最初に、私たちは人間・環境学会という学会をつくって、ある一つの方向性というか求める環境のイメージを持っていると思います。これは、人間だけでもなく、環境だけでもなく、人間と環境が一緒にそろって響き合うというか、そういう人間・環境系のパフォーマンスですね。これがいい状態になるという、そういう環境を求めていると思うんです。パフォーマンスって性能という意味ですが演奏という意味がありますよね。楽器の演奏。そういう響き合うというのがいいのかなという、オーケストラみたいな、そういうところが我々の目指す環境じゃないかと思うんですね。

この写真は、東大の本郷キャンパスの工学部１号館前広場です。ここは昔というか今でもあるんですけれども、蛇塚という木を切ると祟りがあるという、そういう云われがあって木が切れなかった。それをあるときお祓いをして木を切ってこういう芝生にして、雰囲気のいい広場になったわけです。大きなイチョウがあって、程よく建物に囲まれて、それから車が来ない。そういう物理的な環境が非常に良くなったということもあって、ある時から留学生が座って弁当を食べるようになったり、だんだん人が集まるようになってきて、それから保育園もここを遊び場に使ったりとか、子育て中のお母さんたちがここを広場のように使ったりとか、あるいは犬の散歩の中継地になったりとかと、いろいろなことに使われてすごくいい場所になっているんですね。何でこうなったのかというのは、よく分かりません。一つ一つの要因というのがいろいろ考えられるのですが、でも、まさに人間と環境が響き合っている、そういうところじゃないかと思うんです。

残念ながら、今、東大は部外者が入れない状況になっているので、犬の散歩も、保育のお母さんたちも、ここは使えない状況になっています。今、こういった我々が見つけてきたいい環境が使えなくなっているなというか、そんなことを感じています。

このあたりは鈴木さんに説明していただいたほうがよかったのかもしれませんが、高層ビルの公開空地は、だいたいほとんど使われていない、管理上使わせていないと言ったほうがいいのかもしれませんが、でも三井 55 広場みたいな生き生きとした所もあります。それから右の写真は、スパイラルですね。槇先生の設計ですが、ここがこんな居場所になるとは思ってもいなかったというふうに槇先生もおっしゃっていますが、実際すごくいい居場所になっているわけです。ここはたぶんまだ今でも生きていると思います。こういう居場所は計画的にやろうとしてできるわけではないと思うんですけれども、我々は求めてきたんだと思います。

■私たち（建築計画）が求めてきた環境イメージ



これは我々が最近やっていたことですが高齢社会の住環境の在り方として、いろいろ提案したいことがありますが、ちょっと 2 点ほど。

まず「家に一人で閉じこもらないこと」ですね。家に一人で閉じこもっていると、いろいろ、メンタルではうつになったりとか、フィジカルだとフレイルという、骨折しやすくなったりとか、そういう問題があるということ。

それから、そのためには「外に居場所があること」。ファーストプレースとしての家、セカンドプレースとしての職場、サードプレースですね。そういう居場所があるということがないと、家に閉じこもらざるを得なくなるわけで、外に居場所が求められているということを主張してきたわけです。居場所というのはなかなか難しいところですけれども、適度なつかず離れずの人間関係ができるということだと思うんです。

居場所が必要ということで、フォーマルな施設とか集会室を計画するわけですけれども、それだけではなく、インフォーマルな施設というとちょっと大げさですけれども、例えば、お店があればいろいろ人との付き合いができますし、ベンチのような場所もできる。それから、病院や薬局の待合は、これはよく昔、「病院に来なくなったけれども、あの人はどうしたんだろうねという、病気になったんじゃないですかね」という、そういう笑い話になりましたけれども、そういう役割というのはあったわけです。一人で予約なしで使える場所という、そういうのが非常に重要なんじゃないかということで、集合住宅とか商店街のベンチというか、そういうものというのが非常に重要な場所ではないかと思うんですね。

ここではコインランドリーと書きましたが、東日本大震災の被災地の仮設住宅でコインランドリーが人の居場所になっているとかと、そういう話も聞いたことがあるんですけれども、そういうような場所というのが重要なところではないかと思うわけです。

ここは建て替え工事が進んでなくなってしまいましたが、柏市の豊四季台団地の商店街のベンチです。いっぱいベンチがありますが、特にここが面白い。時間を変えていろいろなグループがたむろしているんです。右の写真のように、昼間から酒を飲んだりしたりしているグループもいます。

これはちょっと細かい図ですけれども、時間をかけて調べて、あるベンチが、午前中は男のグループが来

て、それが撤退して、また昼間は女性のグループが来て。そういういろんなグループたちが、ほぼ居場所として使っている。そういうことをいろいろ調べたのですけれども、そういうことがいいことなのか悪いことなのかはよく分からないですけれども、昼間から酒を飲んでいる人もいるんですよね。そんなことがあって、本当にこれは面白い研究で、僕らはベンチとかも作ったりしたりして、いろいろ実験的にやったり細かく調査したんですけれども、こういうのを論文に出しても、なかなか通してくれないという恨み節もちょっとあります。

これは東京芸術劇場のロビーです。左側がコロナ前の状態で、このちょっと欠けた丸いベンチをつなげて、内側を向いてソシオペタルになっている人たちもいますし、ソシオフーガルになっている人たちもいるし、いろいろ多様な座り方をしていたんですね。それが、コロナの自粛期間中はしばらくここも閉鎖されていたんですけれども、閉鎖が明けると、右のようにきれいにソーシャルディスタンスに、たぶん施設の方が測って並べ変えたんだと思うんですが、こんなふうになってしまいました。世の中全体がこんなふうになるということを、私は非常に恐れております。

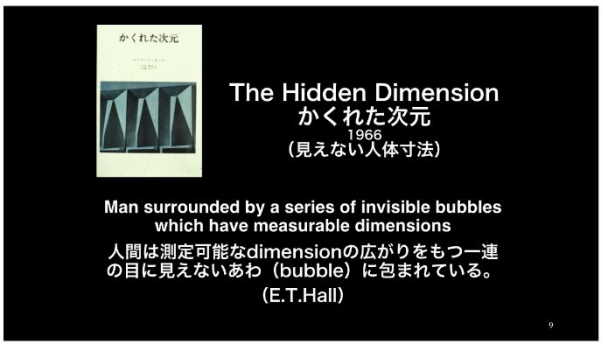
■わたしたち（建築計画）が避けようとしていた環境のイメージ

私たちが逆に避けようとしていた環境のイメージ、こういうふうにしてはいけないと思っていたイメージとして、収容施設にしてはいけないというものがあります。ロバート・ソマーは『タイトスペース』という本の中で、近代建築はまるで刑務所のようだというふうに言っているわけですよね。刑務所って入ったことがないので、どんな所か僕もよく分からないんですけれども、何か分かるような気がするんです。それで、要するに収容施設なんですよね。

私たちの東大の建築の某大先生は、そんな鶏小屋の研究をしてどうするんですかとか、こんな豚小屋の研究をしてどうするんですかという、よくそうやって言われて怒られたんですけれども、鶏小屋、豚小屋という言い方はあまり正確じゃなくて、養鶏場とか養豚場だと思うんです。養鶏場はまるで機械というか、要するに僕も子どものころ養鶏場があって、鶏がいっぱい並んでいて、卵がお尻から出てきて、その卵が無情にも雨樋みたいなところを通って取り上げられていくという、そういうところを見て、いや、鶏というのは可哀想だなというふうに思ったんですけれども、そういう一種の機械ですよね。機械というか、そういう収容施設というか機械。そういうふうにしてはいけないというのが、考え方としてあったわけです。

そういうことを頭に置いてみると、いろいろ戦後の集合住宅とか、あるいはバブル前かな、オフィスとかも、要するに効率だけを追求して、施設のような所に人が住まわされてきたというふうに思うわけです。今後もいろいろ、今は衝立（ついたいて）とかで囲われてきましたけれども、そういうような施設にしてはいけないというような思いがあります。

ソーシャルディスタンスをどう考えていくかということですけれども、我々は動物なのか、あるいは動物としてのヒトなのか、あるいは人間なのか。それから経済を稼げばいい人間なのか。そういうことを考えて、人間の尊厳ということを考えながら、ディスタンスということを考えていかなければいけないのではないかということを思うわけです。



あんまり時間を取ってはいけないと思うので、この辺はエドワード・ホールの『かくれた次元（The Hidden Dimension）』で、ソーシャルディスタンスという言葉

が出てきますよねという、そういうことなんですけれども。

■建築計画の規範を考え直す

これから建築計画の規範といいますか、今までこうあったほうがいいというか、そういうパラダイムはどうなっていくのだろうかということを考えていく必要があると思うわけで、そうすると、住宅とか家族の居場所とか、それから食事の場ですね。「向き合って食べるな」とか、そんなことを言われるんですけれども、ちょっとそれも違うんじゃないかなというような気もします。それからオフィス。オフィスはたぶん、もうテレワークで必要なくなるという話が出てくると、建築屋さんは仕事がなくなりますよね。それから商業施設、飲食店、もっと重要なのは学校ですよね。大学の話はこれから出てくると思いますけれども、小中学校の教室とか学級の在り方とか、そういうものが変わってきざるを得ないと思います。

病院とか病室とかも、たぶんいろいろ変わってくると思います。これはナイチンゲール病棟ですが、クリミア戦争で死ぬ人よりも病院で院内感染で亡くなる人が多いということでナイチンゲールが考えたと言われていますけれども、天井を高くして、窓を大きくして、それから一人一人に窓がある。これが基で、だんだん病室は変わっていくわけですが、そういう基本に戻るようなことがあるんじゃないかなという気がします。

たぶん今日は小林健一さんが来ていらっしゃると思うのですけれども、またその辺の話を後で伺えたらというふうに思います。私の話はこれで終わります。

岩佐：どうもありがとうございました。まさに、我々が本来期待していた環境みたいなものがどんどん奪われていっていて、私も全然どこにも出掛けていないのですが、考え方によっては、確かに養鶏場にいるようなものかもしれないですね。ネットなどのサービスで外に出かけなくてもいろいろ手には入りますが、果たしてこれが人間の尊厳の守られた生活なのかと言われたところは、非常に重要なご指摘だと思います。どうもありがとうございました。

引き続きまして、南博文先生にお話をお願いします。

距離の意味変容はどこまで可能か？

南博文／九州大学

南博文（九州大学）：今の西出先生のお話を聞いて、「あっ、MERA だな」というふうに思いました。ちょっと久しぶりな感じがいたします。その辺も、今の我々の生活状況だなと思います。

自己紹介ということでいうと、岩佐先生が会長ということで 5 月から務められていて、私もちょっと不思議な縁で、副会長に指名されました。そんなのはないだろうと思っていたのですが、MERA ってそういうことがあり得るんですよね。ということで、これも MERA らしいかなということでお引き受けしておりますし、岩佐会長を私は全面的にサポートしたいと思います。と言いながら、こういう技術面で、本当におんぶにだっこの状態です。

本日のテーマの「親密さの再設計」ということで、私の疑問というか問題意識というところをお話しさせてください。副題として「距離の意味変容はどこまで可能か？」。距離ということは、当然人間環境学――先ほどの西出先生のお話にあった――の、たぶん非常に根本的な概念なのだけれども、それがどうなってきたんだろうかという、あるいはどうなっていくんだろうかという問い掛けです。

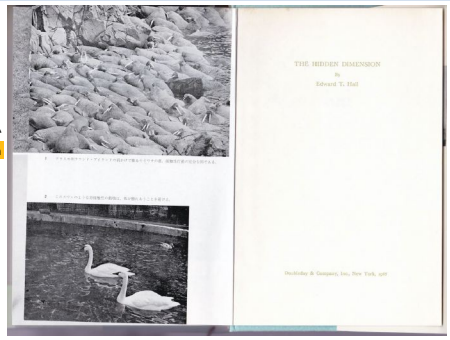
■あらゆるところにある矢印（われわれの状況）

今日は職場からアクセスしています。今いるのは 5 階なのですが、階下に降りていくと、こういうのがあちらこちらにというか、あらゆる場所にあるわけですね。皆さんの現場も一緒じゃないかなと思います。「離れて」という外向きの矢印しか言わないんだけれども、そればかりでいいんでしょうか。今日テーマになっている「親密さの再設計」というのは、西出先生の我々の立場とは何なのかということと、たぶん同じ問題意識だと思います。こっちの矢印しか出されていないじゃないのかと。

それは当たり前といえば当たり前なんだけれども、そもそもこのキャンパスには誰もいないんです。「このキャンパス」と言っていますが、九州大学の伊都という、伊都国という『魏志倭人伝』に出てくる地区にできている新キャンパスで、昨年文系が全面的に移転して、移転が完了しました。たぶん最後の大型大学キャンパス移転だと思いますが、非常に立派な建物が造られま

した。このキャンパスは福岡市内から小一時間かかる郊外にあり、かねがね教員も学生も「遠いな」と思って、距離の問題がありました。だけれども、いまは授業もそうだし会議もそうですが、すべてオンラインでされていて、キャンパスには誰も来ません。今回のコロナ対応で距離の問題はいっぺんに解消したというか、なくなったかのように見えています。ということで、距離についての悩みという、今まではむしろそれがあったんですが、今回は距離が悩みじゃなくなって転換してきているというところを、今日は問題にしたいなと思います。

■行動規範はどこまで変えられるか（人はどこまで動物か）

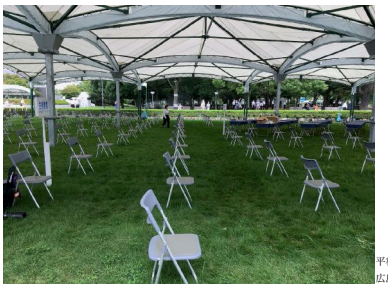


先ほどの西出先生のお話にもあった、ホールの『かくれた次元』の中に出てくる一番最初のページです。これは写真で。アザラシと人間って一緒かというと違いますが、でも少なくとも群生動物というか、群れをつくって集団で生きてきて、進化してきた生き物であるということに変わりはないと。その場合には、近さということがむしろ防衛上必要だったわけです。敵から守る、あるいは弱い者、子どもを育てるときに近くにいるということで守られるということが、生き物としてずっと培ってきた方略だったわけですね。戦略だったという。そこに近さということがある。

先ほどのソーシャルディスタンスということでいうと、ホールの言っているのはプロクセミックスであって、接近学と訳されるべきことで、だから矢印が逆なんですね。ホールが言っている、ディスタンスということを問題にしているんだけれども、むしろ近接学というか、近接することの意味を彼は問うていたんじゃないだろうかというふうに読めると思います。

こういう群生動物であるならば、離れるということがむしろ孤立ということであって、それは不安を起こすというふうに考えるべきですよね。だけれども、我々は、先ほどの西出先生の問いにもあったとおり、どこまで動物なのか。もちろん動物なんだけれども、その動物的に決まった、バイオロジカルにできている遺伝子の中にたぶん組み込まれているであろう行動規制というのがあるんだけれども、どこまで変え得るのかという問題になるかなと思います。

■ひとはどこまで規範に適応すべきか



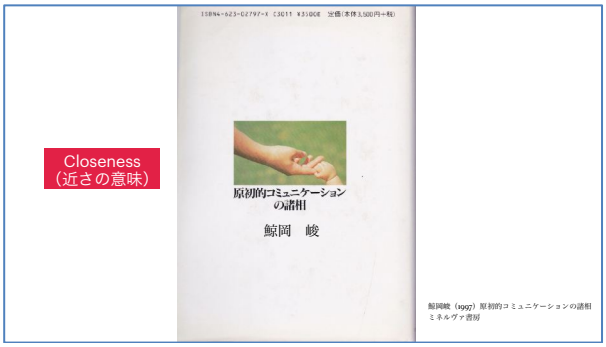
社会活動を行うということ、集まって何かをするときにということに関してです。これは今年の８月６日、広島の平和記念式典の会場です。私も参列して、この椅子の中には入れなかったから周辺の取り巻きの所にいましたが、こういうふうになっているということが、いわゆるニューノーマル、新しい日常と言われていますが、この日私も参列して、こういうふうにやっていても、やはり集まる意味はあると。だから、これは問題だというふうにも見えるんだけれども、でもやっぱり集まることを我々がするのは、それは何なんだろうかという、逆向きも考えられるんですね。

この日はこういう状態だったというのを改めて見て、そのときのニューノーマルという、ノーマルという言葉が正常というふうに訳せますが、「ノーム（Norm）」という英語がここに入っているんだなと。改めて、言葉としてノームって規範ですよね。だから、さっきの、動物としての我々の持っている距離感ってあるんだけれども、これはノームなんだと。だから規範なんだと。規範って社会が作るものですから、その社会の作り出す新しい規範に、我々はどこまで適応していくんだろうかという問題になるかなと思います。

人間は適応力がありますから、適応できるわけです。で、今このようなことをしているわけです。だけれども、過剰適応という問題。心理学でいえば、むしろ過剰適応の問題ということが厄介かもしれない。適応できてしまうが故に、その中で見えていないことが持ち越されていくかもしれない。学校の中で過剰適応している子、いわゆるいい生徒なんだけれども、そういう生徒がじゃあいいのかというと、必ずしもそうじゃなくて、むしろそういう人たちが抱える問題というのが厄介かもしれない。最後に臨床という問題で、そこをも

う一度お話ししたいと思います。

■近さの意味

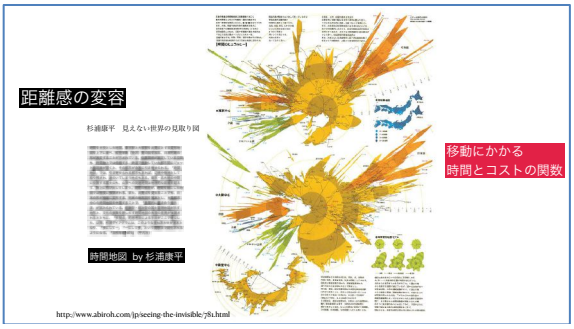


どうしてかということでいえば、例えば幼い子どもが遠慮して親から離れるというと、これはちょっと自然じゃないというふうに、直感的に思いますよね。だから、赤ちゃんと親との間に近さというか、「クローズネス（Closeness）」と英語でも言うし、日本語でも、「近い」ということが「近しい」というか「親しい」という意味になっているわけですから、その直接的な近さということが、人間の絆というか、ボンディングという言い方をしますけれども、その根拠になっているというか基になっているということは、ある面で明らかですよね。そういう身体的な基盤というかコミュニケーションの基盤に、直接手と手が触れ合っているとか、肌と肌が接触しているということが親子の絆をつくっているということは、我々は十分分かっていることなんですね。

言い方を変えるというか、隣関係というのがありますよね。隣関係というのは、近くにいるが故に、どうしてもというか関わり合ってしまうし、気に掛かりもするというか。人間関係って抽象的なものじゃないですから、具体的に、体と物とか空間を通じて、ぶつかったり接触したりということで起きている。言い方を変えると、エンボディーというかボディーによって起きていること、具体的なものであるということですよね。これは良くも悪くもと言うべきですよね。これは『となりのせきのますだくん』という絵本です。彼はいわゆるいじめっ子なんだけれども、でも、そのちょっかいを出しているって何だったんだろうか。最後にこの絵本の中でも転換するんだけれども、それは気に掛けているから。もっと言うと好きだからという、そういう関係性がそこでできてきているということなわけですね。

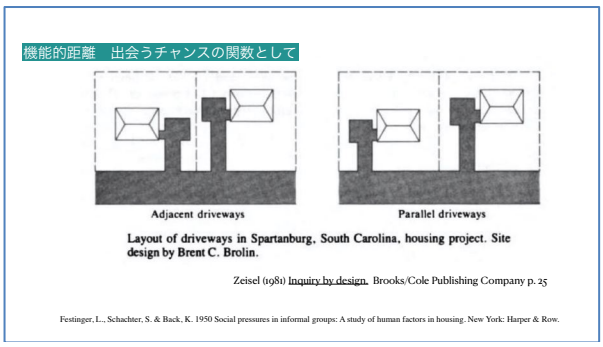
ディスタンスということで、今、大学でオンライン授業になっていて、結構学生の評判は高いですよね。これも後でディスカッションに挙げられると思うんですけれども、意外に学生たちは満足できているみたいで。どうしてかということの一つに、関わりをあまり持たなくて自分の授業が受けられるという、むしろ快適な授業の形になっているかのようなところがあって。じゃあ、それでいいんだろうかということですね。こっちの関わりの良さ、悪さを含めてということがなくなっている。ここにあるように、隣の席というものが存在しなくなっているんじゃなかろうかということです。

■距離感の変容



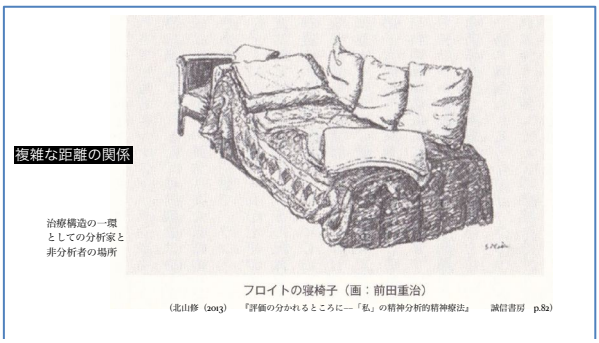
ここで改めて、近さ、逆にいうと遠さって何なんだろうか、距離って何なんだろうかということで、例えば今回私は九州から参加していますが、通常、MERAが東京であったりとか大阪であったりとかしたときにも、九州から来ましたと言ったら、遠くから来られましたねと言われるわけです。だけれども、飛行機で 1 時間半で着くわけです。だからこちらの実感としては、そんなに遠くない。これは時間地図という、杉浦康平さんがグラフィカルに描かれているもので、日本の国内で移動するのにかかる時間ということで、距離を表しているということ。だから、距離って空間の隔たりだけではなくて、そこにかかる時間であったりとかコストであったりするということ、こういうふうにして考えていくということで、既にもうこれは、技術革新の時代から起きている。地球が縮んできたという言い方をされるように、距離ってもう既に随分変容してきているだろうということですね。

■環境行動学的な距離



もっとこれは人間・環境学会的な話ですが、ちょっと図がなかったので、フェスティンガー、シャクター、バックの MIT の男子寮の研究ってご存じの方がいらっしゃると思うんですが、さっきの隣ということだけれども、隣だから友達になったり挨拶するわけではない。廊下型で、階段の位置によっては、反対側の隣とはあんまり接触がないというか。だから、動線を含めたときの距離ということで、距離というかメートルで測れる距離だけが距離ではないという、機能的な距離ということを考えていくべきで、むしろ環境行動学的な距離というのがこういう中から言われているし、デザインの上ではそこを生かすというところが、これまでに考えられてきたんだと思います。

■屈折した距離

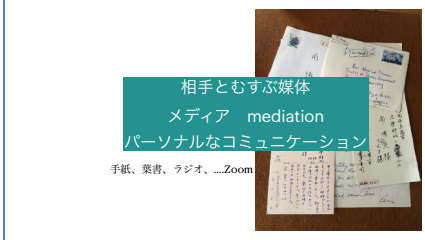


これはちょっと私も扱いかねる話題なんですが、臨床という、臨床心理学に限らず、医療の場合の臨床といわれる場合の臨床って、床に臨むと、床というかベッドに臨むという言い方をしていて、どういうことかというと、ベッドサイドにいるという形で、医療であれ看護であれ、人間は人を診ることができる。ということで、医師が患者を診るときには、すぐそばにいるんだという。そうしないと診ることができないというモデルを、フロイトは精神分析の中にこういう形で生かしたんじゃないのかということです。

彼は、ベッドではなくてカウチ、寝椅子に患者さんというかクライアントを横にならせて、ただし、通常の医療と違うのは、枕元にいるんだけれども、枕元で顔を合わせない位置に分析家は座っていると。そういう形で治療を行うんだけれども、ここでこういうセッティングが非常に意味があるということを、小此木啓吾さんとか、あるいはこの本の著者の北山修さんとかは、治療構造というふうにおっしゃっています。ですから、こういう座り方、こういう位置で、この場所をずっと繰り返すということが、治療にとってある機能を果たしているということを言っている。ここにも距離があるんだけれども、この距離感ってどういうことだろうか。ちょっと、だから、屈折した距離というふうにいうことができるんじゃないかと思います。

ということで、結論ではないんですが、こういう問題を提起したいということです。

■親密さをうむ媒体（メディア）



それで、今起きているディスタンシングというのが、距離のある中でどうやって親密さを持つことができるかという問題って、今に起こったことでは実はないんじゃないだろうかということで、手紙による文通であるとか、旅先から絵葉書を送るとか、そういうときには、距離があるのだけれども、親密な関係をそこで持つことができているのじゃないのか。そういう表現の手段になっているんじゃないのかということですね。

それは言い換えると、メディアというふうにいえるかもしれない。そのメディアということの中での距離ということを考えていくべきじゃないのかな。それでいうと、手紙、葉書という手段がありましたし、ラジオというのも、これも古いかというと、古いようでいて意外に根強く残っている。

今回はオンライン授業を皆さんもやっていらっしゃると思うのですが、映像を流す場合もあるけれども、情報量を減らすために、音声だけで配信するという授業のやり方も取っていらっしゃる方があると思うんですね。そこの中で意外に起きている感想として、「音声だけでいい」というような学生の意見もあって。そのときに何が起きているのだろうか。一つは、例えば学生から来たメッセージを音声で返してあげるときに、

意外にそれが深夜ラジオ的な感じというか、音で聞いて近くに感じるというようなことが起きているのかもしれないということで、今、我々がやっているZOOMも含めてですけれども、メディアということに関して、離れているんだけれども近くに感じるということは、意外に古くからやっているかもしれないということで、距離ということを改めて考えてみたいということで、問題提起で、私からはここまでにしたいと思います。以上です。

岩佐：南先生、どうもありがとうございました。そもそも、今回の「親密さの再設計」というテーマ設定自体が南先生のご発案ということで、タイトルの意味というか、持っている意味の深さというものが、非常によく分かりました。本当にどうもありがとうございました。

続きまして、鈴木毅先生にお話しをいただきたいと思います。

他者の認知・コミュニケーションの拡張
媒介物を通した他者認知

鈴木毅／近畿大学

鈴木毅（近畿大学）：それでは、話題提供ということで、貧乏性でいっぱい持ってきたので、ざっとやります。

南先生から、ソーシャルディスタンス下の居方ということが一つのお題としてあったのですが、今回は「他者の認知・コミュニケーションの拡張、媒介物を通した他者認知」というような話をしたいと思います。

「応仁の乱」と共通する転換点　藻谷浩介

「我々はお互いに対してまた親切になっていいんだ」
と気づいてほっとした。ブライアン・イーノ

陸上競技の試合再開。意外なことに中高生を中心に続々と新記録　為末大

非常事態で誰もが気づいた「**会うことは暴力**」　斉藤環

パーティ文化の終わり　辛酸なめ子『新・人間関係のルール』
ひとり切られるとしたら私かな……なんて寂しく考えたりしています。

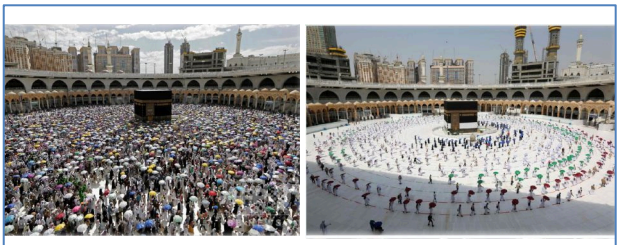
オンラインで結構できる　**ネットで仲間はできない**　山極寿一
文字というのは，人間が発明した言葉の「化石」

今のコロナの状況って、本当にいろんなことが起こりまして。これは、最近いろいろ見聞きしたのの中から気になったことを集めてきたのですけれども、藻谷さんは応仁の乱と言っていたりするし、イギリスがブレグジットで非常に分断していたのが「親切になっていいんだ」と皆が気づいたこと。ブライアン・イーノが言っていたりとか、本当にいろんな点で考え直す機会になったと思います。今日読んだのですが、為末さんのこれも面白かったですね。陸上競技が試合をずっとやっていなくて、再開したら、意外なことにどんどん新記録が出た。要するに日本のスポーツは練習し過ぎじゃないかとか、いろんなことに気づかされて、面白いと思います。

南先生の話にもありましたけれども、オンラインで結構できるというのは皆さん感じたことだと思います。私もそうですね。まさか設計をオンラインで教えられるとは全然思っていなかったんですけれども、意外にできたと。一方で、京大の山極先生は、「ネットで仲間はできない」と指摘されています。

今日は松本先生がそういうお話をされると思いますが、確かにそういう大きな問題もあると思います。

■ソーシャルディスタンス　様々な工夫と対処



2019　2020　AFP

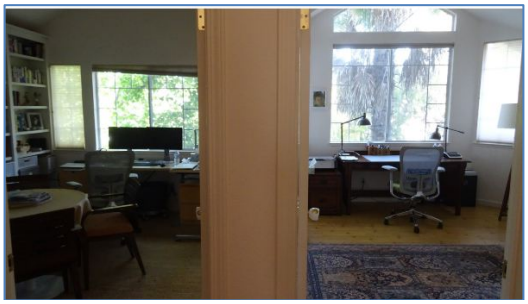
フィレンツェの広場にソーシャル・ディスタンスを視覚的に
意識させるインスタレーション「StoDistante」　AXIS webmagazine

西出先生も幾つか示されましたけれども、本当にいろんなことが起こっています。メッカの大巡礼もこんな感じで、去年とは全く違う風景になっています。それから、各地でいろんな試みが起こっています。フィレンツェの広場では、こういう、ソーシャルディスタンスをデザインして誘導するようなインスタレーションをやっているようです。

■アカデミックシアターではマグロが活躍

我々近畿大学の誇るアカデミックシアターでもいろんな対応や仕掛けがありまして、置いてあるのが何か分かるでしょうか。こうやって仕切りとマグロの頭で座らせないようにしています。「これでいいのか？」という気はするんですけれども、わかりやすく宣伝にもなる。念のため言っておきますが、私は全く関わっていませんよ。

■住まい方・働き方、住宅・オフィス、居住地・都市はどう変わる



建築関係者の方が、今一番関心があるのは生活や町がどう変わるかでしょう。住まい方・働き方、住宅・オフィス、居住地・都市が確実に変わると思います。いろんな提案が既に出ています。私も関心はあるんですけれども、全然フォローできてません。たまたま去年、アメリカのサンフランシスコにある、ガボールさんという、阪大の舟橋先生のところでドクターを取れられた方の新しい家に行きました。まだ全然コロナがない頃ですけれども、結構在宅でやっていて，週 3 日ぐらいしかオフィスに行かない。すごい立派な環境があってああ、そういうものかと驚いたんですが、それだけじゃなくて、奥さんもちゃんと在宅で仕事をされていて、夫婦 2 つ分が揃っている。日本がこれを目指すのかどうかという辺りも考えないといけません。今までだと、旦那だけという考え方が多かったと思うんですが、たぶん両方働く、場合によっては、子どももオンラインで家から授業に参加するということは確実にあると思うので、そういうときにどうなるかというのは、私もすごく関心があります。

■ソーシャルディスタンス下での居方

居方の目的は「賑わい」撲滅（笑）

居方　３つのポイント

1．人の居る情景を語る「言葉」を増やす

2．「他者」と居合わせることの価値

3．デザインで「居方」の質は変わる

お題だった居方についてちょっと言い訳をしておきますと、居方は、人のいる情景を語る言葉を増やすというのを目標にしているんですけれども。具体的には、パブリックスペースを計画するときの目標として、「にぎわい」以外の言葉を増やすというのが一つのテーゼになっています。にぎわいを撲滅しようとまで言うと言い過ぎですけれども。そういう観点からいうと、最近はちょっとにぎわいばかりをまた言い過ぎているんじゃないかという印象だったので、現在のコロナの状況の、距離を置く居方の事例というのを見た方もいると思いますけれども、基本的に密じゃないんですね。元々密な状況の居方というのは、あんまり実はやっていなくて、先ほどの近接学の話は、確かにそういえばそうだったなと、いまさらのように南先生のホールの話を聞いて思ったんですけれども。基本的には、離散的というか密ではない人のいる状況の価値を追究してきたので、今回もそういう近接する事例については、あまり取り扱うことができません。

南池袋公園（撮影　垣野義典）

これは東京理科大の垣野先生が撮られた非常に美しい写真ですけれども、このように、それぞれが思い思いに、ばらばらにいるという状況を評価している立場からすると、そんなに今の状況は、にぎわいが多くな

くていいんじゃないかと思っていたりします。

思い思いの居方　　御射山公園

強制疎開で生まれた京都の町中には珍しいスケールの公園

ポケモンGOの居方

これは京都にある公園ですけれども、これも「思い思い」ですね。ここが一時期、ポケモン GO を大人がやりだしたときにこういう情景になりまして、正直、このときのほうが慌てた覚えがあります。いい大人がポケモン GO をやる居方をどう評価していくんだということで、困った覚えがあります。それに比べると、現在の状況は、そんなに居方的には考慮していません。

■他者との関係の再考・つながり信仰の再考

むしろ最近オンラインでいろんな講義なりサークル活動をやってみて、他者との関係を再考する重要な切っ掛けになったと思っています。言い換えると、人とつながるという信仰に対して、これまでと違うやり方がある、そういう認識が出てきたような気がします。前々から思っていたんですが、それが増幅してきた感じがします。

■自分と相手の間に交わされるメッセージだけをコミュニケーションと捉えるのはちょっと狭い

これまでは、私の認識だと、コミュニケーションというと自分と相手の間に交わされるメッセージ、その矢印が向こうからこっちに来て、こっちから向こうに行く。それが言葉だったり、動作だったり、表情だったりということだったんですが、それだけがコミュニケーションと捉えるというのはちょっと狭いんじゃないかということが、今回、コロナの状況で思ってきました。

■学生は教員同士の会話から多くを学ぶ

アナロジーですけれども、今、講義を対談形式でやっている先生もいらっしゃると思うんですけれども、学生は教員同士の会話からすごく多くを学んでくれるんですね。学生本人、自分に向かっての言葉よりも、むしろ他の人に向かった言葉のほうが響く感じがあると。

■本があると誰とでも深い話ができる

MERA でも一回ワークショップをやりましたが、私はここしばらく本によってできる場所について研究しています。一回、ゼミで一箱古本市というのをやったときにつくづく思ったのは、互いに知ってる本があると誰でも深い話ができるということです。初めて会った人とでも、ものすごく深い話がいきなりできる。本を売っているということは、それを読んでいると見なしていいわけですから、そのことについて聞いてもいいということになる。だから、コミュニティカフェの研究をずっとやっていて、カフェはなんとなく男が入りにくい。女性だと、誰とでもうまく話題を作って話せるんだけれども、男は話題がなくてなかなか入っていけない。けれども本があるとできるということに気づき、本の可能性についてここしばらく研究してきました。

■オンライン読書会をやってみた

で、近大の中で学生と読書会のサークルを去年つくったのですが、今年になって、コロナだから、じゃあオンラインでやってみようとやってみたら、結構面白かった。オンラインでちゃんとできたんですね。4 月にアナウンスしたら 50 人ぐらい申し込みがあり、実際に 30 人弱集まりました。初めて会った人、他のキャンパスの人、いろんな学部の人が集まって、結構面白かったんです。

■味をしめてハチクロに挑戦

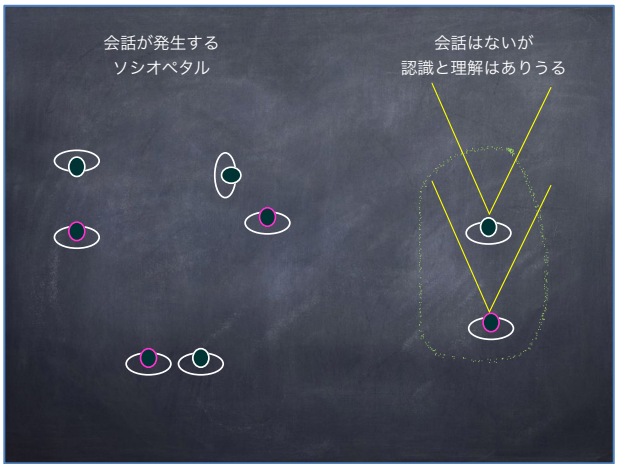
これは結構できるなと思いまして、実は前から温めていたネタがありまして『ハチミツとクローバー』という漫画があるんですが、「なぜハチクロ？」と、そこは突っ込まないでほしいんですけれども、Kindle を使えば、結構深いコミュニケーションができるんじゃないかと考えました。たまたまゼミに、おばさんに薦められて深く読んでいる学生がいたので。説明が長くてすいませんが『ハチミツとクローバー』は、大学を舞台にした青春群像漫画です。羽海野チカさんという人が作者ですけれども、これについて深く読んでいる人が 3 人いれば、たぶん読書会は成り立つなと前から思っていて、これを ZOOM でやってみました。たまたま 3 人見つかったのと、それから読んでない人でも聞き手で参加してくださいという企画でやりました。

■Kindle でハチクロ全巻買い直し

これを実際やってみたのですけれども、結構面白い。手応えがありました。もちろんコミックス全巻持っていたんですけれども、Kindle で全巻買い直しをしました。何でそれをやったかというと、画面共有で全部のページを見せられるんですね。チャプターのブックマークを付けておいて、それからチャプター何々の何ページと言ってくれるとすぐそこに飛べるのと、あと、ページアニメーションで一緒に読めるんです。これは、たぶんリアルな読書会よりも見やすくできるんですね。つまり、全員がリアルなテーブルにいるよりも、むしろ ZOOM の画面共有のほうが本の中身を皆で見られるというのに気が付きました。

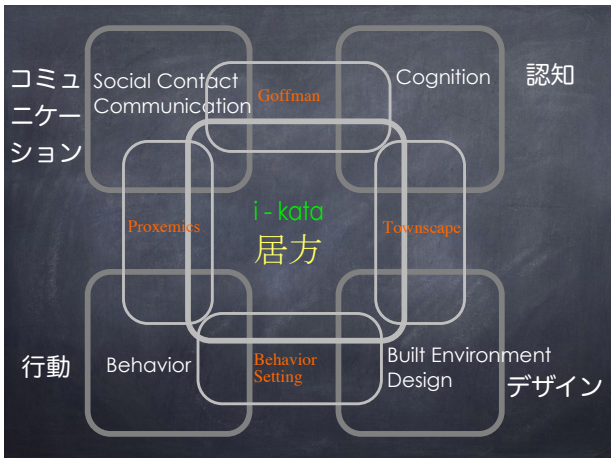
作中で着メロになっている『ムーンリバー』について、オードリー・ヘップバーンを知らなかった学生が詳しく調べてきたりとか、このシーンについてどう解釈したらいいかをみんなで話したりとかと。あとこれは、ネタバレになってしまいますけれども、主人公が意外な人を最後に選ぶわけですけれども、それはいつからなんだという議論のときに、「ここのトビラのシーンでこういう絵があったからここじゃないか」という辺りのことを議論ができたと。だから、見て共有する対象ですね。同じものを見ながら話すとものすごく話ができるということを、やってみて非常に感じました。

■同じものを見ながらのコミュニケーション・他者理解



だから、普通はコミュニケーションというと、人と人が、むき出して何か話をするという感じがしちゃうんですが、そうじゃないんじゃないかということです。実は居方についても、他者と居合わせることの価値ということについて、いわゆるソシオペタル、ソシオフーガルの話ですが、普通の会話は、当然ですけれども、左図の位置関係で起こるんですけれども、右図では起こらない。西出先生は、これを説明するときには、こういう状況でしゃべるのはスパイだけだという、スパイとかがひそかに物を渡すときにこうやってしゃべるんだみたいなことを、確か言われていた覚えがあるんですが。ただこの中で、会話はないけれども、他の人を後ろから見ると、認識と理解はあり得るというのが、居方で主張したいことの一つなんですね。

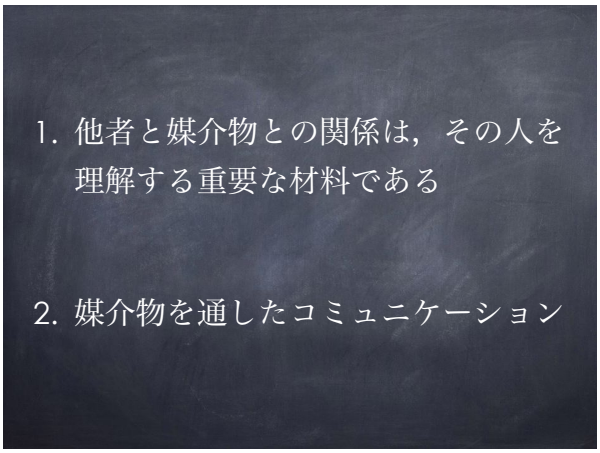
■風景として、他者を通して認識すること



後ろから見ている、人を見るだけ、全然知らない人だし話もしない。けれどもこの人のことをいろいろ想像できると。この人がどういう人で、何を思っているかというのを勝手に思い巡らせることができるという。こういうコミュニケーションとか認識というのもあるということです。これはあんまり最近見せていない図なのですが、人がいる場面というのは、その周りに行動とデザインとコミュニケーションと認識、全部が入っていると思うので、たぶん、風景として、他者を通して認識をするというのは非常に重要ではないかということを言いたいんですね。

こういう、高い所からいる居方についても、他者、そこにいる人と都市の環境を後ろからみている。これがさっき言った媒介物としての漫画に当たるんですね。つまり、他者とものの関係から、人はものすごくいろんなことを理解・認識できるのではないかということに、コロナになって、いろんなオンラインでの読書会というかゼミをやってみて、あらためて思ったというのが最近の認識、気付きです。

■何かを媒介とすることで深く理解する



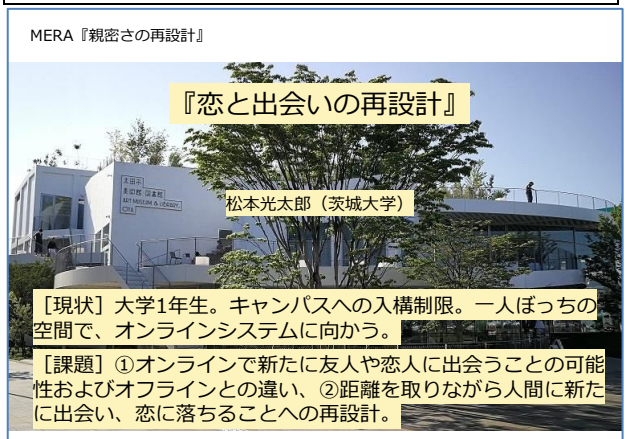
コミュニケーションというと、人と人の間の、何かダイレクトなコミュニケーション、会話とか身ぶりだったりじゃなくて、何かを媒介にすることによって深く理解することができるというのが、最近気付いたことです。以上です。

岩佐：ありがとうございました。やはり鈴木さんの話は、毎回聞くたびに新しい発見があるというか、そんなところをご覧になっていたのかというのがいろいろあって、本当に面白かったです。どうもありがとうございました。

引き続きまして、松本光太郎先生、よろしくお願いいたします。

恋と出会いの再設計

松本光太郎／茨城大学



松本光太郎（茨城大学）：よろしくお願いします。今日話題提供をすることになった経緯を少し。この会の企画を話し合った際に、今年度前期オンライン授業が続いた私の勤めている大学で、私が 1 年生のもろもろのサポートをしていた話をしました。その話の中で、授業はオンラインで、学生サポートもオンラインで全部

やるという状況の中で、課題の一つは，友人をつくることや恋人をつくることがこの状況下で可能なんだろうかということを話したんですね。その話に対して、岩佐先生や鈴木先生に関心を持っていただいて、それで今日の企画の話題提供に入ったというのが経緯です。友達関係や恋人関係の専門家ではないのですが、この状況下で何ができるのかということを考えてみたいと思いました。

これまでの話題と違って浅はかな感じなんですが、でも、恋というのは人にとってとても大事なことですし、出会いということもそうですね。友人に出会うこと、こういう研究会で出会うことも、やはり私たちにとって欠かせないことですので、そのことを今日は考えてみます。「恋と出会いの再設計」という大きなテーマで、今日は話してみようと思います。

■対面の経験がないままオンラインに突入した１年生

今年４月から大学に入った大学１年生は、キャンパスへの入構が制限されている。小さな大学、専門学校等では授業を対面でやっているところもあると聞きますが、多くの大学の授業はオンラインで、そして多くの１年生はアパートで、もしくは実家の自室で独りぼっちでの受講が続いているわけです。

２年生以上はそれまで対面という経験があった上で、オンラインに移行しています。一方で、大学１年生はそういう対面での経験がなくてオンラインが始まり、その経験しかない点で大きな違いがあります。大学１年生が、もし仮にこのオンラインの状況が続いたときにどうなるのかということを、私はとても心配しているわけです。

■２つの課題

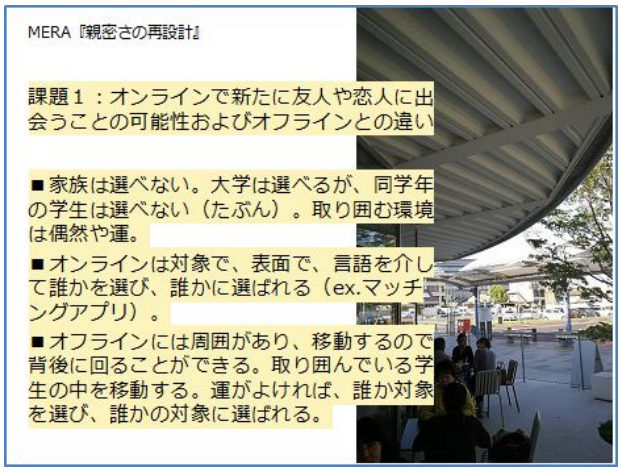
今日考えたい課題は２つあります。１つ目は、オンラインで新たに友人や恋人に出会うことの可能性、およびそのことに関連して、私たちの通常生活しているオフラインとの違いについて，２つ目は、ソーシャルディスタンスが求められる状況下で、距離を取りながら人間に新たに出会い、恋に落ちることの再設計についてになります。この２つの課題を考えてみることが今日の課題になります。

今後、後期に入って、仮に大学でキャンパスに入構できるようになる。そして、オフラインが始まる、対面授業が始まったとしても、やはり密にならずに距離を取らなければならないという状態は続くんだと思います。よって、直ちに、去年までと同じように大学の中でキャンパスライフが営めるということでは決してない。オフラインになったとしても、ディスタンスを取らなきゃいけないことに変わりはないわけです。なので、ディスタンスを取らなければならない中で人間に新たに出会い、恋に落ちることは可能なのかを考えることは、無駄ではないだろうと思います。これまでの話だけではなく、今後の話でもあります。

スライドの背景ですが、MERA っぽくと思って持ってきた建物の写真です。ご存じの方は多いと思いますが、群馬県の太田市美術館・図書館、平田晃久氏が設計した建物です。今日の話と関わります。

この写真は、図書館・美術館の軒下ですね。軒下にカフェがあります。カフェを営むことを想定して造られた、そういう軒下になっています。

■大学は選べるが同級生は選べない



まず課題の１つ目は、オンラインで新たに友人や恋人に出会うことの可能性およびオフラインとの違いでした。

人間を発達的に見ると、私たちの人生というのは、家族を選べませんし、親も選べない。望んでいないし選んでもいないんだけれども、その親から生まれて、その家族の中で成長していく。そこで世話になりながら大きくなっていくのですね。親や家族だけでなく、私たちはもろもろを選べません。自分の容姿も選べません。自分が好きな食べ物や嫌いな食べ物、よく親からニンジンを何で食べないとか、トマトを何で食べないというように責められることがあると思いますが、でもそれは自分で選んでいないのです。障害もそうですね。自分で選んでいない。ところがそれで責めを負っちゃったりするので、とても理不尽です。

というように、私たちはもろもろの選べなさの中で生きていて、その中で大学というものは、成績のうんぬんというのはありますが、それでもいくらか選べる。

この大学に行きたいという形で選べる。ただし、入ったときに、自分の周りにどういう同学年の学生がいるのかについては選べない。似たような高校から似たような大学に行くというケースはありますが、それでも多くの学生は、身の回りの学生は選べないわけですね。

なので、キャンパスライフを営む上で、キャンパスの中にいる取り囲む人たち、いわゆるサラウンディング(Surrounding、取り囲む環境）というのは偶然や運に委ねるしかないわけです。自分で選んだ人たちがいるのではなくて、見知らぬ人たちがいる環境の中に入っていって、そこでキャンパスライフを営んでいく。それが大学の中では起こっていることだと考えられます。

■オンラインは表面しか経験できない

オンラインでいろいろ行われているわけですが、オンラインにはどういう特徴があるかというと、まず対象である点が挙げられます。

今、皆さんはモニターに向かって、この座談会を視聴されていると思うのですが、このモニターというのは対象ですね。触ることができて、姿形があるわけです。

それから、オンラインというのは表面であることがあります。表面しか見えないですね。例えば、オンラインマージャンを例に挙げると、オンラインマージャンでは相手のパイが絶対見えない。でも後で取り上げるオフラインでは、マージャンのパイは、自分が移動して、相手の後ろに回れば見えるわけです。見ないのは、先ほど南先生のノーム、規範が見ちゃいけないとなっているだけで、オフラインでは見ることができるわけです。ところがオンラインでは絶対に見えない。ということで、オンラインというのは表面なんですね。表面しか私たちは経験できない。

それから、言語がオンラインにおいてはとても重要な、より重要度が増しているツールになります。マッチングアプリというものがあって、人と人が出会うときにも、身長が何センチであるとか、収入が幾らであるとか、男性女性であるとか、そういうもろもろの言語によって相手を選び、そして誰かに選ばれるということがオンラインでは起こっています。なので、何者であるかという言語情報が分かった形で出会う。何者であるか分からない人とはなかなか出会えないことがオンラインの特徴だと考えます。(加筆：オンラインで何者か分からない相手とやりとりすることはよくあります。そこから親密な関係になることは、むしろ何者であるのか分からないことを望んでいるがゆえと考えられるかもしれません。)

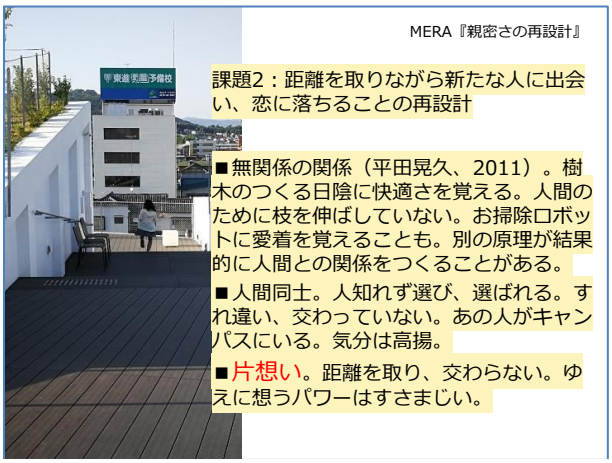
■オフラインには周囲があり移動ができる

オンラインとオフラインの違いについて。オフラインには周囲があります。移動することで、背後に回ることができる。先ほど話したオンラインマージャンとの違いです。マージャンをやっているとき、私たちは相手の牌を背後に回れば見ることができる。マージャン以外でも、トランプ、たとえばババ抜きをやっているとき、相手の背後に回れば、カードを見ることができる。

オフラインのキャンパスライフでは、取り囲んでいる学生の中を移動しています。オンラインでは、それができない。偶然や運でたまたま同じキャンパスに居合わせた人たちの中を歩いて、その中から、運が良ければ誰かを選ぶ。あの人はすてきだなとか、あの人は面白そうだなとか、友人になりたいなとか、そういうことを思い、誰かを選ぶ。逆に、自分は気づいていないかもしれないけれど、誰かから自分が選ばれる。じっと誰かが見ていて、自分のことを友達になってほしいとか恋人になってほしいということを思う。そういうことが、この取り囲んでいる中で、移動するが故に起こりうる。

オンラインとオフラインには、いずれも長所と短所がありますが、出会いや行為に落ちることは周囲の中を移動できるオフラインによって可能なのではないかと現時点では考えています。

■無関係の関係



次に、距離を取りながら人間に新たに出会い、恋に落ちることの再設計について話していきます。ここで建築家の平田晃久氏の話が出てきます。彼は本の中で、有名な「からまりしろ」について書いていますが、同じく「無関係の関係」ということも書いていました。樹木

を例に挙げていて、樹木がつくる日陰に、人は快適さを覚える。涼しくて気持ちいいなと思う。ところが、樹木というのは、人間のために枝を伸ばしているわけではない。樹木の論理というのか、樹木はあくまでも光合成をするために枝を伸ばし、葉を広げている。ところが樹木とは別の論理で、人間は樹木の下で心地よさを覚えるわけです。

同様のことが、私が研究している掃除ロボットにおいても起こっていて、掃除ロボットに人間が愛着を抱く。でも掃除ロボットは、別に愛着を抱かれるためにいるわけではなくて、ただ部屋の中を移動して、掃除をしている。樹木のつくる木陰に心地よあすぉ覚える人間、掃除ロボットに愛着を抱く人間、いずれも論理が違っているにも関わらず、結果的に人間との関係をつくることがある。

建築設計を含めてお仕着せがましいデザインや至れり尽くせりのデザインというものがよくあるわけですが、そうではないデザインを説明する一つの論理に、「無関係の関係」というものがあるのではないでしょうか。

太田市美術館・図書館のデザインで、私が面白いなと思ったのは、この写真の奥に椅子が置いてあるんですけれども、先ほどの写真の軒下のように、はじめからカフェとして利用することを想定しているデザインがある一方で、壁沿いの置かれている椅子は日が陰ったときに利用される、つまりこの建物は、内側の空間をつくるために造られた建物なわけですけれども、建物の外側に日陰ができることによって、そこが場所になる。平田氏のデザインの一部だと思うのですが、人間の論理に沿って、いつも人間が利用できる環境を設えるのではなく、日の光のような自然の論理に沿ってできた場所を人間が利用できる、そんな場所をここにつくっているのかなと理解しています。

■交わらずに出会う

人間の論理と自然の論理をいったん分けて、そのうえで出会うことをここでつくっているということなのかと、私の誤解かもしれませんが、そういうところが面白いなと考えています。

さらに、先ほど南先生がカウチの話をされていた精神分析の話と少し関わるかな思った点があって、人間同士においても、距離を取って交わらずに出会うことがある。カウチの場合では、近くにいるんだけれども視線は合わさない。自由連想なので、患者はただ言葉だけを好きに発する。お互いの言葉は微妙に交わらない。それでもそこには出会いがあるはず。ソーシャルディスタンスを取らなければならないキャンパスライフにおいても、学生同士が交わることはできないなかで、人知れず選んで、選ばれる。人と人、樹木と人間、それから掃除ロボットと人間のように交わらずに出会っているようなことが、今、ソーシャルディスタンスを取らなければならないキャンパスにおいても可能ではないでしょうか。

■「片思い」の可能性

距離を取らなければいけない状況でキャンパスにいて何も起こらないかというと、そんなことはないでしょう。例えば、あの人がキャンパスにいることを思うけど、その人に話し掛けはしない、相手はひょっとして自分のことを知らないのかもしれない。でもやはり、気分は高揚するわけです。これは片想いですね。

関係性といったときに、双方が結ばれることを通常は想定している、友達や恋人になることを想定していると思うのですが、すれ違いながら、でもそこに何か関係性が生まれる。鈴木先生の話と関わるでしょうか。そういう片想いに注目してはどうでしょうか。

片想いはとても面白い現象だと思っていまして、お互いに想い合うよりもよっぽどエネルギーが大きい、パワーはすさまじいというように思っています。妄想を抱いたり、相手をとても美化したり、それらが行き過ぎるとストーカーになるわけですが、ある種のエネルギーはとても大きいわけですね。

キャンパスライフの中で、ディスタンスを取らなければいけないから、いろんなことがかなわない。でも、片想いはかなう。それは、ディスタンスを取らなければならなくても、キャンパスに通う価値になるんじゃないか。というところで、私の話題提供は終わりとしたいと思います。ありがとうございました。

岩佐：ありがとうございました。向き合う以外の、いろんな関係の仕方というのが、鈴木先生のお話と連続して見えてきたんじゃないかと思います。

最後に広田すみれ先生にお話しをいただきます。広田先生は非常にいろんなことに関わっていらして、リスクマネジメントもそうですし、最近でしたらこの『5人目の旅人たち』という本でも大変話題になっていらっしゃいます。どうぞよろしくお願いいたします。

オンラインの場でどう親しみを作れるか？

広田すみれ／東京都市大学

オンラインの場でどう親しみを作れるか？
メディアの事例：テレビ、オンラインの芝居
zoom疲れはなぜ起こるのか

keywords: 日常性、同じこと（共感等）を共有する

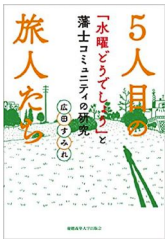
広田すみれ（東京都市大学）：MERA はたぶん 10 年前ぐらいまで会員だったんですが、ちょっといろいろありまして、今は会員じゃなくなっていますが、環境心理学会のほうは所属しています。ただ、専門はリスクコミュニケーションとかリスク認知とかそういうのをやっていたんで、今回は MERA に適切な話題になるかどうかよく分からないんですが、ちょっと努力をしてみました。

「親密さの再設計」って、すごくいいタイトルだと思うんですが、私はメディア情報学部というところにいますので、オンラインの場所で親密さの再設計じゃないですけれども、どうやったら親しみはつくれるんだろうかということで、最近やった研究はメディア関係の話なので、その事例を 2 つぐらいご紹介するというのと、心理学者ですので、ZOOM 疲れというのがどうして起こるのかというのをちょっと調べていましたので、そういう話をご紹介したいなと思います。

■「水曜どうでしょう」のファンコミュニティ

ローカルテレビ番組「水曜どうでしょう」（HTB）のオンラインコミュニティ

- 大泉洋の出世作の旅バラエティ（1996年～現在）
- 現在も不定期で新作公開中
- ロイヤルティの高いオンラインコミュニティの存在
- 広田すみれ（2019）「５人目の旅人たち －『水曜どうでしょう』と藩士コミュニティの研究－」（慶應義塾大学出版会）視聴者へのインタビューと参与観察による（第35回テレコム社会科学賞奨励賞受賞）



北海道→全国への拡散（地元ローカルを通して）

- 面識のないファン同士が**「番組が好き」という共通性だけ**でネットで繋がる(ブログ→mixi→SNSへ）（**共感の共有**）
- クライシスの時、番組がソーシャルサポートになる
- 海外でも、オンラインコミュニティがソーシャルサポートになる例がかなり報告されている（特に**マイノリティ**）

☆対面したことがなくとも物理的距離を超えて親しみが生まれる

岩佐先生にもご紹介いただきましたが、広田は狂ったのかという感じで書いたのがこの本なんですけれども、北海道テレビの大泉洋の出世作の旅バラエティーの『水曜どうでしょう』のファンコミュニティの研究というのをしました。オンラインコミュニティというのはちょっと不正確ですね。

この番組は、96 年から 2002 年までレギュラー放送をやって、その後は不定期でまだ現在までやっているんですけれども、すごくコアなファンがいて、そしてオンライン上でそのディープなファンコミュニティというのが存在するのですごく有名です。そのファンにインタビューをして、ちょっと実験とかもやったのですが、どういうふうにしてこういうメディア上を中心にしたコミュニティができたのかという話をまとめました。

■なぜファンがつながったのか

もともと北海道だけでやっていた番組が、全国のローカル局に番組の提供をして、それでファンが拡散しました。何で番組に興味あつまったかというと、諸説、いろんな要素がありますが、コミュニティの、今日の話と関係する話でいうと、SNS 的な要素があります。皆さん面識がないのですが、ちょうどネットがだんだん広がっていく時期に、この番組は 2000 年にちょうど番組の掲示板というのを立てて、そのころは本当に掲示板を立てただけだったんですけれども、非常に珍しいことに、そこを利用して、ディレクターがファンとすごく長いこといろんなやりとりをするということをしましたので、今の SNS の先駆というふうに位置付けられるんじゃないかと思います。

番組側要因：オンラインと番組の親和性

- 番組ウェブサイトを作って2000年からネット上の番組掲示板でファンとコミュニケーション（マメに返信、広報に限らない日常的な他愛のないやり取り）
- 時々出演者（大泉洋、鈴井貴之）も書き込む

→ 番組の日常性（ゆるさ）と水平性

※現在のツイッター広報の先駆

オンラインでも親しくなった理由

- 対面環境内でマイノリティであったこと（番組を知っている人が現実には限られていた）→**共感の共有**が大きな動機
- 相手との共通性が明確
- 匿名でも、そのうち誰であるかがある程度わかってくる（**準実名**）ことにより、個人的に親しくなる

じゃあ、何でファンがそんなにつながったのかということは、聞いていると、ファンもネット上にブログを立てて、それで番組が好きだという共通性だけで、全く面識がないのですけれども、それだけでお友達になったという部分が、どうもあるらしいんです。

今日のこの話題の話でいいますと、実は先ほどの鈴木先生の話とすごくつながるのですけれども、やっぱりこの人たちは同じ番組を見ていて、どうもその番組

の話をしたいんだけれども、周りに知っている人が誰もいないので、しょうがないのでネット上でコミュニケーションを始めたという側面があります。

だから全く知らない、私も学生を教えていて、1年生は本当に全然知らない同士で友達になれるのかということが、いろいろと学生からも言われたんですけれども、やっぱり、でも一つの可能性としては、何か同じことをするとか同じものを見るというのが、実はそういうことについてすごく大事なんじゃないかなというふうに思っています。

それからこの番組の場合だと、クライシスのときに番組を見ると元気になるという話があり、それでソーシャルサポートになりました。東日本大震災の後に、東北のファンが結構この番組を見ていたとか、掲示板を見て泣いたとか、そういう話があるのですけれども、そういうつながりもあって、割とそういう番組でありながら、大きなファンコミュニティをつくり、コミュニケーションの土台になるということがありました。

ですので、対面したことがなくても、これは、実はこのファンの間では今でもそうなんですけれども、全く会ったことがなくても、この番組のファンだというだけで、物理的な距離を超えて友達にすぐなれるというのが、この番組の人たちが割とよく言うことではあります。

■共感の共有

番組上としては、実際に、先ほども言いましたように、オンライン掲示板でファンとコミュニケーションをやったんですけれども、大事なことは、まめに返信したということと、非常に、単なる広報じゃなくてすごく日常的なやりとりをしたということが、割と重要なんじゃないかなというふうに思われます。

これはちょっと繰り返しになりますが、対面の環境では、他の人たちは知らないマイノリティなんですけれども、それを通じて共感の共有ができるということがすごく大事だということと、匿名でコミュニケーションするんですけれども、そのうちに、聞いていると、イベントとかに行ったりすると、これは誰かということがだんだん分かってくるというんですね。そうすると、そのことで、匿名なんだけれども一応つながっていくということができるというのがあります。

今日につながる話としては、だから、メディアの中でも、先ほど南先生が物理的な距離を超えるという話をしていましたけれども、必ずしも、実際に今までの対面環境だと物理的な距離が障壁になっていたところが、逆にそうじゃなくなるところがあるというのが、この番組からも見られるかなというふうに思いました。

■演劇の「気配」をどうオンラインで伝えるか

演劇のオンライン配信

- 難しさ：演出家で環境心理学者の加藤智宏氏より
  - 「通常の芝居にある**気配**がオンラインだとなくなるのが難しい」（聴衆の気配、他の役者の気配？）
  - 拍手もない

それで、実は私は最近お芝居に関心を持っているんですけれども、環境心理学会のまだ理事かな？の加藤さんという名古屋にいらっしゃる方が、お芝居の演出家なんですけれども、面白くて環境心理学の勉強をしていて、今、非常勤で教えたりもされています。

テレビの現場もそうだし、演劇の現場もそうなのですが、3密の状態が非常に起こりやすいので、実はクラスターがテレビで割とよく起こるのはそのせいではないかと思われるんですけれども、その中でどうやって芝居をするかという話で、この際加藤さんに話を聞いてみるかなと思って、どうしているかというのを聞いたところ、やっぱりお芝居をするときには、通常だと気配があるというんですね。気配というのは、厳密にはよく分からないのですけれども、他の役者さんたちの気配もあるし、聴衆のほうの気配もあって、それを使いながらお芝居をするんですが、オンラインの場合は、それが非常になくなってしまうので、やるのが非常に難しい。

それから、これは後に出てくる劇団の方が言っていましたけれども、お芝居の場合終わりになるとは拍手があるんですけれども、オンラインでは拍手がないので、やっているほうとしてはすごく拍子抜けになってしまう。じゃあ、こういう気配を、お芝居って、たぶん社会的距離をすごくよく使っているものだというふうに思っていて、前から注目していたんですけれども、そういう人たちが、じゃあ、その距離を詰めることができないときにどういうふうにしてお芝居をするんだろうというので、興味を持って見ていたところ、オンラインで面白いお芝居をした劇団がありました。

■気配をチャットで代用する

京都の劇団の「ヨーロッパ企画」、一たぶん（メンバーの）何人かは「ああ、この人は『半沢直樹』で見た」とか、そういう知られている役者さんがいるんですが一この人たちが今、非常に熱心に活動しています。4 月から YouTube で生配信を何度もやって、実は今年の 8 月で、この間 2 回目をやっていましたけれども、9 月にかけての 3 回目でライブでお芝居を配信するという試みをしています。やっぱりお客さんがいないので、気配に代わるものというのはたぶんチャットぐらいしかないと思うんですけれども、こんな工夫をしているということなんですが。さっきの番組もそうなんですけれども、送り手側と受け手側というのが、メディアの場合はかなり、テレビなんかはすごくはっきり役割を分けるんですけれども、今のオンライン、ネット上のものの場合は、かなり参加型なので、そこの差が小さいと。それで、それを使ってなるべく一体感をつくろうという、場づくりというのをたぶん意図的にやっているんだと思うんですね。

配信されている動画画面の右側にチャットがあります。これはヨーロッパ企画にはこれだけじゃなくてこの倍ぐらいの人たちがいるんですけれども、ここで出ている人と同時に、出られない人たちがこのチャットに入って、必ずここで何らかの形でチャットをします。そうすると、何か「今日は何とか君が来ているね」みたいなことを言うわけです。

それから、こちらのオンライン上に乗っている人たちも、必ず一度ぐらいはこのチャットを読んで、「ああ、お客さんが何とかと言っていますよ」というふうに必ず触れるということをしているので、それによって配信側と送信側が完全に独立しているんじゃなくて、なるべく一体感をつくるという努力をしているようです。

■同じ行動をみんなでする　日常性で連続する

それからもう一つは、同じテーマを決めて、同じ行動をする。これは先ほどの鈴木先生のお話にありましたが、例えば「夏祭りっぽいものを食べる会」というので、この場合はオーディエンスの側は参加していないんですが、みんなでいろいろな工夫をして、「（同じ）食べる」ということを定期的に配信してきました。

芝居はライブで 2 回配信したんですが（注：この後さらに 2 回配信）、「何月何日の 3 時過ぎぐらいから配信します」というふうに言っていて、「3 時過ぎ」というのは何なんだろう、と思っていたら、嵐山電鉄を 1 両借り切って、そこの中から配信しました。この後（8 月 16 日）もう一回（京都の）銭湯から配信しているんですけれども、現実の場から配信することによって、聴衆と（心理的）距離を狭めて、日常性が連続するような形を考えているということですね。

あとは、恐らくそれも考えたんだと思うんですけれども、銭湯も嵐電の場合も借り切っているので、他に人が入ることはないけれども、この（ライブ配信での嵐電の窓の）外側に見られますように、現実の環境というのがちゃんと映るようにできているわけですね。乗っている人たちはマスクはしない。ソーシャルディスタンスも、これを見ると分かりますように、横並び、しかも斜めに座っているんですね。つまり、感染についてはある程度は配慮するけれども、それが不自然にならない環境というのを考えて、どうやら、あまり普通の人に『コロナの現実』というのを感じさせない形の環境をつくる、ということをしたようです。

それでこれもライブで銭湯の前ですけれども、終わった後に、今度は聴衆のほうが、ここ（チャット）に黄色いのが並んでいますけれども、拍手（注：拍手の手のマークは黄色い手の形で表示される）をチャットでやる形で、双方向でのやりとりが行われています。実はこの劇団をちゃんと知ったのは、コロナになってからなのですけれども、何かちょっと親しみが湧くな、と思いながら見ています。それはたぶん、番組とか劇団自体が、特別な存在じゃなくて日常性を重視しているというスタンスであったということが、割と大きいんじゃないかなと思いました。

さて、話は変わりますが、メディアでもオンライン

でも親しみをつくることはできるだろうと思いはするんですけれども、ゼミの学生なんかに聞くと、「対面で友達になっていたからオンラインになってもいいけれども、そうじゃないとやっぱり友人ができるかどうかは疑問だ」と言うんですね。

■ZOOM 疲れの理由

Zoom疲れ(zoom fatigue)の理由（cyber psychologyのFranklin, A.)

- 人は対人場面で**非言語情報**を自然に利用しようとし、それが**感情として親しみを感じる源**
- video-chatではこれが欠如。特に**アイコンタクト**

→ 長く続くと脅威を感じたり、逆に極端に親密になったりする

非言語情報を自動的に探し続けることによる疲労

これは調べて出てきたのでご紹介しますが、その理由はいろいろあるんですけれども、ZOOM 疲れというのがあります。それはやっぱり対人場面で、人間というのは、特に感情のリソースとして非言語情報、特にアイコンタクトというのをすごくよく使うので、ZOOM みたいなものを使うと、どうしてもその非言語情報が欠けてしまうので、そうすると、すごくそれを一生懸命探すというんですね。探すばかりに、探してもなかなか、もちろんそんなに細かく見えるわけではないですから、そうすると非常に疲れるということがあるようです。

マルチパーソンスクリーンの問題

Group video chatは格納されたパネルのようになってしまい、2 人のみが話し、残りは聞くだけだが、他の全員の声に気づいているので、パネルディスカッションがうまくできない

通常は**周辺視**で**他のnon-activeの参加者の振る舞いを認知するのに、それができない**

→手がかりを探し続けて刺激過剰で疲労

他にZoomについては
閉鎖環境を意識しやすい
「カメラに監視されている」苦痛　などが疲労の原因としての指摘も

それから、マルチ・パーソン・スクリーンでたくさん人が出てくるときに、中心視をして相手を見るということをするんですけれども、なかなかそのたくさんの人たちを処理できないので、この心理学者によると、話し手についてもあんまり意味のある存在というふうには判断できないということがあるようです。これは、細かくは説明しませんけれども、マルチタスクに注意を分けるというのとはちょっと違っていて、自動的に起こる。だから、本人は別に意識しているわけじゃないんですけれども、自動的にそういうふうにリソースを振り向けてしまうので疲れるんじゃないか、ということが主張されていました。

この場合、それで普通の場合は日常はどうするかというと、中心視じゃなくて周辺視を使うことで、他にたくさんいる人たちの振る舞いを認知することができるのですが、それができないということがすごく大きな問題じゃないかなというふうにいわれている一方で、これはどうなのか分かりませんけれども、逆にいうと、発達障害とか知的障害のある人たちにとって利益がある可能性があるとか、自閉症スペクトラムなんかの場合だと非常に苦労するんじゃないか、というようなことも言われています。

■横並びでオンラインする

親しみがわくオンラインの工夫（webから）
☆横並びの方が話しやすい（デイリーポータルZ トルー氏）
https://dailyportalz.jp/kiji/remote-yokonarabi
対面着席による緊張　　cf. Sommer(1969)

最後はちょっと雑談的に。じゃあ、ネットでどうやったら親しみが湧くかという工夫をするというのをいろいろ探してみました。私自身もやらなきゃいけないので調べてみたんですけれども、その中で面白かったことは、横並びのほうが話しやすいということです。これも先ほど出たような気がしますが、これは分かりやすい漫画なんで、これもちょっともらっちゃいましたけれども、こういう ZOOM の画面というのは、要するにソマーなんかの言っているような対面の状況なんですけれども、対面の状況って、必ずしも友達同士で話をするときに話しやすいわけではないと。だから、これは普通の素人の人ですけれども、横並びで話したいというんですね。2 人で海を見るように、何かを一緒に見たい。この人たちは、この人がビデオ通話の画面で横顔を出してそれを横に置いて、動画を前のほうで同時に再生して一緒に見ると、結構親しみが湧きましたという話をしていました。

■同じ対象や同じ行動で生まれた「共感」をシェアできる環境

だから、先ほどのメディアの場合だと、共感を共有という話をしていたようですけれども、でもやっぱり、対面するというよりも並んで同じものを見たり、同じことをするということが、実は親しみが湧くことのヒ

ントかもしれないなというふうに、今、ちょっと思っています。

オンライン飲み会についても、同じものを一緒に食べると結構親しみが湧くんじゃないかという話があるので、ひょっとするとですけど、先ほどの鈴木先生の話を聞いて、うん、そうだと思って私は見ていたんですが、同じ対象とか同じ行動をすることから、何か共感が湧くと。共感が湧いて、ただその共感が湧いたものをただ単に自分で持っているだけじゃなくて、それを他の人たちとうまく言語的、非言語的にシェアできるような環境ができると、もうちょっとオンラインでも親しみができるのかな、あるいは、というふうに今思っております。以上です。

岩佐：どうもありがとうございました。今までの先生の話をうまく拾っていただいて、どうもありがとうございました。

対談

岩佐：引き続き対談に移りたいと思います。

今まで、距離を取るということに対してややネガティブな印象を感じていた部分も多かったし、そういう懸念もある一方で、今まで近づくことで実現できたことができなくなるという制限の中で、今までと違う可能性が生まれてきていると思います。なので、今の状態をポジティブに捉えるという見方も、少し懸念を持つというところもあるけれども、可能性としてあるんじゃないかなというふうに感じました。

話がいろいろと拡散した部分があるかもしれませんけれども、どういうポイントからでも構いませんので、何かここまでのお話を聞かれて、ご感想とかコメントとかがございましたら、お願いできないでしょうか。

■大学の取り組みは恋人づくりの助けになるか

鈴木：松本先生に質問ですが、非常に大きなテーマというか、私もどちらかというとオンラインでの可能性をと言っているんですけれども、一方でやっぱり１年生を中心にものすごくばらばらにいる。しかも、さっきもお話ししましたが、バイトもできないと、誰とも話していないような人もいるので、すごく重要だと思います。大学で何かそういう試みをされているんですよね。さきほどは割と理論的に話されたような気がするんですが、実践で恋人はできそうなのかとかは、茨城大はその辺はどうなんでしょうか。

松本（光）：はい、ありがとうございます。時間がないこともあって、理屈で何が可能なのかというのを考えたのが今日の話だったんですけれども。これを考えたのは、そもそも前期にオンライン下で１年生がずっと過ごしてきて、この後戻ってきたとして、これまでのことを取り戻すことはできないにしても、今後どういうことが可能なのかなということは、やはり考えるんですね。私のところの職場では、これまでに学部長と語ろう会をやったり。希望者の１年生に来てもらって、まあ20名ぐらいでしたけれども、学部長とやりとりしたり、今度は学生同士が集まる会というのも、教員のほうで場所というかZOOMでつくって、それでそういう機会をつくるんですけれども。ただ、ただそういう場所をつくっても、学生にとってみて、僕のところのゼミ生が言っていたのですけれども、「地獄」だというふうに言っていて。そういう、じゃあ、ただ会わせればいいという話ではないんですよね。

その点で、先ほどの鈴木先生だったり広田先生が言われていた、何か対象があるということというのが、関係をつくっていくというのは一つ確かにやり方としてあるなと思いながら聞いていました。

そのときに、私としては、今回の話として、何を一つの目安にというか、「何がかないますよ」とか、「こういう可能性がありますよ」ということを示せないものかなと思っているところです。どうも１年生はまだまだというか本当に暗中模索というか、全く分からない形で、しばらくブランクがあっていきなり大学に入るという形なので、その点で、今日私のところで、飛躍がありますけれども、片思いがあるよという、そういうことを言うのは、何か面白いかなと自分では思っているんですけれども。

鈴木：それはいいかな。それはいいのか（笑）。

岩佐：でも確かに、今、１年生の心情を思うと、キャンパスに何を求めるかというときに、どんどん薄れていく期待感の中で、何かそういう光が見えたら、もうちょっと頑張ってやってみようかなという気になるかもしれませんし、今置かれている状況について、もう少しポジティブに考えられるということがあるかもしれないですよね。ありがとうございます。

松本（光）：はい。

岩佐：ちょうど同じようなことで、旭化成ホームズの松本吉彦先生から、松本光太郎先生へのコメントということで、「距離を取る必要性が生じたからこそ、近くにいることの意味が深まる、よりチャンス、運命を感じるという現象はありそうな気がします」ということで、「一緒の場所に居られるはずなんだけれども離れているという、ちょっとロマンチックな状況というのが生まれるんじゃないかと」いうようなコメントも頂いています。確かに、そういう部分もあるような気がします。

松本（光）：はい、そうですね。

■対象や媒介物は最初から場に提供されるのか

岩佐：どうもありがとうございます。広田先生とか鈴木先生とかも、やっぱり同じく向き合っている状態でベクトルがつながっているということでコミュニケーションができるというよりかは、並んで何か一つの他のものを見ているとか、まなざしを共通にするというようなことが、今まで以上に親しさを覚えたりとかをするようなところを感じていらっしゃるのかなと思いました。そこら辺はどうでしょう。お互いのお話を伺って、何か感想とかコメントとかはありますか。どうですか。

松本（光）：西出先生と鈴木先生が、青山のスパイラルビルの話題を出していましたけれども、いわゆる誰かが見ている風景を自分も見るという、言葉で何か語り合うわけではないけれどもそこで何かを共有するというようなそういう経験というのが、距離があっても可能なんじゃないかということというのは、Kindle のページを共有するという方法もあるし、何か同じものを共有するというような、そういうつながり方もあるかなと。その点で、対象があるということは共通していのだけれども、一方で初めから対象を提供するのか、それとも何かおのずと両者が共有するのかというのは、出会い方がだいぶ違うなと思いながら聞いていて。その点は、西出先生、鈴木先生、どうですかね。

鈴木：西出先生、どうぞ。

西出：いえ、鈴木先生、どうぞ（笑）。

鈴木：「媒介物」って、たぶん「メディア」と訳されると思うんですが、南先生が最後に、昔から手紙とか何とかとおっしゃっていましたが、今は、どちらかというとメディアって器のほうになっているんですが、実際はやっぱり中身だと思うんです。『水曜どうでしょう』とか、演劇であるとか、コンテンツというと軽くなっちゃうけれども、何かやっぱり話題にできるもの。

例えば、昔からイギリス人は天気の話をすると言うじゃないですか。話題がなくても、話せる手段を持っているみたいなマナーというか。さっきも言いましたがコミュニティカフェだと、本当に男の人って、初めての人と話すときに何もないですからね。そういうのって女性はやっぱり上手じゃないですか。何かを引き出したりするものはあるし。ちょっと思い出したけれども、東大の松村先生は、各地の高校を全部押さえていて、有名人がどこの高校だというのは結構知っている。何かネタをつくるというのはメディアとは違うかもしれないけれども、その辺を含めたコミュニケーション環境みたいなものが大事じゃないかなと思います。

ちょっと思ったのは『ハチクロ』で味をしめたじゃないけれども、「これについてだったら話せる」たとえば「『水曜どうでしょう』だったら話せる」という人って、たぶん普段はお互いは離れていると思うんですね。そういうのをマッチングするサービスって売れるんじゃないかという気がします。

岩佐：なるほど。趣味の同じ人をつなぐということですよね。

鈴木：それを集める。同じ大学、例えば近大の中にもハチクロ好きいるはずなんだけれども、まず出会うことはない。たまたま 3 人いたということで今回できたし、やってみたら、「私もメルカリで全巻買いました」みたいな人が出てきたりしたんです。人間・環境学会でもワークショップなのか研修か分かりませんけれども、そういうばらばらにいる人を集めるサービスって、できそうな気がちょっとしたりします。

岩佐：そうですね。たとえば学校の中でということですよね。見えない嗜好をどうつなぐかですね。

鈴木：だから、同じ学校にいながら全く話さない人って多いじゃないですか、本好きは絶対いるし、そのまま卒業していくというのはもったいないなというのもあって、読書サークルをつくっているというのもあるんですけれども。

松本（光）：でも、今の鈴木先生が言われたのは、どっちかというと、私の話でいうとやはりオンライン型ですね。

鈴木：はい、そうですね。

松本（光）：ある種、初めからもう、そういうふうなものを共有しましょうというふうに決まっていて、目標がそれで共有するということなので、オフラインで、

私が今日話したキャンパスの中でたまたま出会うとか、よく分からない中で出会うという出会い方とは違いますよね。

鈴木：そうですね。

松本（光）：だから、スパイラルで風景を見るという出会い方と少し違っていて、やはりオンライン型だなと思えるところに関してはどうですか。

鈴木：まあそうですね。というふうに考える。

松本（光）：いや、というか、それが駄目といった話じゃないですけれども。ただ、そうなるなとは、やっぱり思うところはありますかね。

広田：大学でそれができるとは思わないんですけれども、ソーシャルゲームの中で、今、知り合いになるというのが結構あるんです。例えば、『あつまれどうぶつの森』ですか、私はゲームを全然やらないんですが、あれだと、ある人がある日、パスワードを持っている人たちがそこに入れるようになるのと、そこだと本当に全然関係ない人が偶然に会うということがあるみたいなので。学生は、「いや、そんなにソーシャルゲームで知り合いになんかならないですよ」と言うんですが、でも、先ほど松本先生が言われた偶然の出会いみたいなのは、逆にそういう場を先につくっておくということがうまくできれば、可能なんじゃないかなという気はちょっとしますけれども。

■共同作業の重要性

岩佐：ありがとうございます。コメント欄でも幾つかコメントを頂いていています。オンラインの話とちょっと関係しているかどうかですけれども、横山ゆりか先生から、「どちらかというと、共有する対象があるということが重要であるということがフォーカスされていたように思いますが、皆が積極的に参加できるような、何かそういう、例えば顔を見ながら一つの作業をするとか、そういった環境をつくっていくということが、やはり親密さを増すんじゃないか。やっぱり同じ共同作業みたいなことが必要じゃないのか」というようなご指摘がありました。横山さん、何か、もしよろしければ、もう少し補足とかをお願いできますか。

横山：：はい。私の所属する教養学部では、1年生に入ったときに、初年次ゼミナールというのをやっているんですけれども、1クラスが20人ぐらいで、それを4～5人ずつに分けてやるというものです。その4～5人に自分の分野の研究を紹介しつつなるべく明確な目標を与えて、学期の最後に何か成果物をつくってもらうという。私は、実は研究企画を成果として発表させるんですけれども、それに向けて一つ一つ、その週の作業をオンラインの中でお互いに持ち寄ってやるみたいなことをしてつくっていくんですね。

そうすると、オンラインですが、最初はみんなおずおずとしていたんですけれども、だんだん関係ができてきて、友達になって親しく話ができるようになったという人たちが結構いました。オンラインの一般講義でグループワークの議論をしてもらっても全然うまくいかなかったんですけれども、初年次ゼミナールみたいな共同作業の場が設定されると、割とお互いに物事に対してどういうリアクションをする人なのかが分かって、親しくなりやすいのかなというようなことを感じた次第です。割と好評でした。

鈴木：具体的にどんな課題でしょうか。

横山：課題は担当教員によっていろいろなのですが、私は建築なのでオフィスの課題なんですけれども、まずはネットでいろいろオフィスの事例を探して、自分がクリエイティブに活動できそうだというものをピックアップしてもらって、それをお互いに交換する。そして、それで一つのスライドを作って、こういうオフィスがいいんじゃないかという仮説を作ってもらう。仮説を作ったら、今度はその仮説をどういう研究がフォローしていて、どういう研究がフォローしていないということをグループで一生懸命探して、その議論をしてもらうみたいなもので、最後は研究企画が出来上がっていくみたいなことをやっていました。

そういう、何か具体的な対象があって、「こういう形式のパワポを1個作ってね」みたいな目標を示した点が、割と分かりやすくて、話がしやすくてよかったという感想を聞きました。

あと、先ほどの話なんですけれども、『あつ森』（あつまれ動物の森）は非常に学生の間で流行っていて、うちの大学の話ではないんですが、1年生に、「君たち、会ったことがなくてかわいそうだね」と言ったら、「あつ森で会いました」とか「あつ森でもう知り合っています」みたいなことを言われたという方がいらしたので、いや、そんなにすごいんだと思った記憶があります。友達になれるかどうかは別として、そういう何か対象、これもどういうゲームか私は詳しくは知らないのですが、そのゲームの中での振る舞いを見ながら、ああ、こういう人なんだなというのが分かっていくという、そういう場であるのかなということは思います。

岩佐：ありがとうございます。ファーストインプレッ

ションが『あつ森』のアバターだったら、その後どのような関係が形成されていくのかちょっと興味深いところでありますね。

■機能的距離と心理的距離

岩佐：他にも質問を頂いていまして、大井先生のほうからもいくつか頂いているんですが、その中の質問として、南先生のスライドに関して「機能的距離のみでしたが、どちらかというと心理的距離の話にも聞こえましたが」というご質問があったんですけれども。大井先生、もしよろしければ、補足していただけますか。

大井：いや、補足も何もありませんが。その辺の、自分が思っていることが間違っていたら、ここで教えていただけたらありがたいなというぐらいの、というか、そういう軽いものも入れておかないと、参加していらっしゃる他の皆さんが書きにくいかなと思って、そういうのも入れてみましたということでございます。

岩佐：ありがとうございます。せっかくですので南先生、そこら辺で何かコメントはありますか。

南：はい。心理的距離って、心理学でいうとそこを言わなきゃというのはあると思うのですが、どちらかというと好き嫌いというか、相手との感情の近さというか、そういう意味で言うことが多いんじゃないのかなと。あそこで挙げていたみたいに、時間が実際にかかるんだとか、だからそういうことでいうと、誰であれ起きていることというのを、機能的というふうに表していたつもりなんですね。それはもう随分前から言われていたというか、だから地球が縮んだというふうな意味です。というところで、むしろ空間という意味が既に変質してきているというようなことでお話ししましたが、でも確かに、大井先生におっしゃっていただいたように、我々が心理的距離のことを扱わなくてどうするんだというのはありますので。

だから、近くに感じるというそこの部分が、何によって決まっているのか。だから、言い方を変えると、親密というか、親近な感じが起きるってどういうときなのかというところが、心理的距離ということになってくると思います。

それをだから、あえてというか、人間・環境論の、それだけじゃなくて、人間の好き嫌いだけで説明できない部分がどこまであるんだろうかというようなところで話ができたらなというふうにも思いましたけれども、言われることは本当にそうだなと思います。

岩佐：で、もう一つ大井先生から、同じ大学ですけれども、大井先生のいらっしゃる大橋キャンパスというか芸術工学部のほうには、こんなのはないですからというご指摘を頂きました。

大井：いや、だいたいいつもそういう傾向にあって、東京と例えば福岡でも感じることがあるんですね。東京で何かすごく厳しくなったときに、福岡はちょっと時間があるとか。伊都キャンパスで厳しくなって、大橋は今のところ割と甘いんですけれども、何か起こると大変なことになるのかもしれませんが。家族については、家族間感染があっても一緒にいちゃいけませんとは言わないわけですから、それを家族だけに今は限定されていて、そういう他のグループであるとか、もともと付き合いのあった人たちが、自分たちで選択してグループでというぐらいはいいのではないかなという解釈で、恐らく大橋キャンパスではそういうことが行われているということだろうと思います。

岩佐：ありがとうございます。九州大学同士だけれどもなぜかZOOMで話し合うという、何か不思議な感覚ですけれども、これが今の、まさにコミュニケーションの仕方なのかなという気もしますね。

■大学の持つ可能性

西出：皆さんはすごく積極的にそういうリモート環境をお使いになって、いろいろ工夫をされていらっしゃるということを感じました。感想ですが、昔、学生のころの深夜放送にリクエストのはがきを書いたこととか、そういう、ちらっと思い出したりしましたけれども、北山修先生も、かつてはTBSの深夜放送をされていましたけれども。

岩佐：そうなんですね。

西出：ちょっとそれはともかくとして、たぶん、今日のメンバーは皆さんそうだと思うんですけれども、大学っていろんな可能性があって、いろんなことができるんだなということを感じました。だから、小中学校とか高校とかその辺で、どういうことになっているのかなというような、ちょっとその辺の話が心配になってきたんですけれども。

あと、どうしても接触しなきゃいけない病院とか介護施設とかと、あるいは僕が最近心配しているのは、やっぱりお店なんですよね。お店で、どうしてもスーパーとかで店員で感染者が出ると、しばらく閉店しますとかと。そうなると、僕たちは飯が食えなくなるので、そういうどうしても接触しなきゃいけない人の環境というか、その辺をどうおもんぱかっていけばいい

のかなということですね。それはちょっと、本学会の趣旨とは違うのかもしれないけれども、やっぱりその辺は考えなきゃいけないことじゃないかなと思いました。でも、大学は本当にいろんな可能性があって、だから楽しみですね。

岩佐：そうですね。大学に関してはある程度のデジタルリテラシーを学生が持っているはずなので、さっきの『あつ森』もそうですけれども、ちょっと違うチャンネルであったりとか、何かそこら辺に新しい可能性が見いだせたらなというふうに思います。

グループディスカッション

岩佐：すいません、私の仕切りがあまりにも悪過ぎて、予定の時間になってしまったのですけれども、厳（やん）先生から、「オンラインでもリアルでもそうかもしれませんけれども、親密さのサイズみたいなのがあるんじゃないか」というご指摘があって、「例えば、もうちょっと少ない人数でディスカッションとかをすれば、ある意味で親密さが生まれやすいようなことがあるんじゃないか」というお話がありました。まさに今は参加者 50 人を代表して 5～6 名でディスカッションしているという状態だったんですが、ここから少しグループディスカッションのほう移っていきたいと思います。

グループディスカッションテーマ

【１】コロナとパーソナルスペース
【２】オンライン下でのフィールドワーク
【３】リモート生活と家族
【４】オンライン講義と親密さ
【５】コロナ禍での日常性確保
【６】離れてつながる

＜グループディスカッション（１時間）＞

クループディスカッションの振り返り

岩佐：どうも皆さま、お疲れさまでした。6 つのグループに分かれて少しディスカッションしていただきましたが、それぞれのグループの振り返りの時間をつくりたいと思います。どんなディスカッションがされたかということを、順番にご紹介をお願いしたいと思います。

まずは「コロナとパーソナルスペース」の西出先生にお願いいたします。

【１】コロナとパーソナルスペース

西出：最初は使い方がよく分からなくて、10 分ほどのロスタイムが発生しましたけれども。ディスカッションというか、いろいろと感想を言い合ったという程度のことなんですが、ご紹介します。

パーソナルスペースということに関しては、ほとんど話すあれじゃなくて、いろいろとそれに関する感想ですね。

まず舟橋先生から、全体的に、物理的なスペースというだけじゃなくて、もっと心理的な問題なんじゃないかということで、タイトルの親密さって何なのかということで、親密さというと、何もその距離だけではなくて、思想信条が非常に似ているとか、そういう問題性もあるということで、いろいろとそういう意味で、そういうことがあるんじゃないかということで。例えば、同じ釜の飯を食うという、同じ釜の飯を食って近づくというか親密になるというのはいったい、親密というか同じ考え方を持つというのはどういうことなんだろうとかですね。それに関連して、それはやっぱり場所という空間の寄与、例えば大学だったなら同じ製図室の雰囲気で、クラスでもあるし。そうなると、かなり人間・環境学的テーマになりますよね。

それから、中津さんから公共空間の愛着というような、そういう、ベンチではなくていろいろ座れるような場所とか、そういうことを考えているというお話がありました。

それから、ZOOM では伝わらないことというのがちょっと話題になりまして、この中でもやっぱり、スメルス系というか、そういう臭いとか手触りとかそういうものが伝わらないと。それは当面は何ともならないですけれども。そういう話が出ました。

それから、環境工学的に、環境というか世の中が 3 密を避けるとか換気とかと、何かいろいろと、本当に意味を正しく理解して伝わっているだろうかという、そういう話も出ました。

それから東京電機大で、家族と同居する方の距離感という、そういったテーマで卒論をやっている方がいらっしゃるようで、その辺の結果も、中間報告を発表していただきましたけれども、またいずれの機会に MERA のほうで発表していただけたらいいんじゃないかなというふうに思います。

岩佐：はい、ありがとうございます。

岩佐：オンラインというものの中で、ZOOM で伝わらないこととは何かとか、同じ釜の飯を食うみたいな体

験というのは、果たしてオンライン上ではどんなことに当たるのかとかと、非常に示唆的ですね。このグループは巨匠の先生もたくさんお集まりいただいたセッションだったので、いろいろまとめるのも大変だったかもしれません。どうもありがとうございました。

続きまして、そうすると「オンライン下でのフィールドワーク」ということで、これは松本光太郎先生にお願いしていましたが、いかがでしょうか。よろしくお願いいたします。

【２】オンライン下でのフィールドワーク

松本（光）：私から報告します。私もそうなんですが、現状フィールドワークは止まっているという、ある種切実な状況の中で、このグループセッションにお集まり頂きました。私自身がこれを企画した意図は、半分はそれだったんですね。それで、現状、やはりフィールドに行けていないであったりとか、もしくはそこがクローズしてしまっているというような状況で、「どうしましょう」ということをそれぞれ話してやりとりしました。

その中で話したんですが、私は今、というかもう 4 年ぐらいオンラインで調査をやっている研究があって。だから、具体的には、現地の人に観察してもらうということをやっているんですけれども。その研究を一方でやりながら、一方でやっぱり止まっている調査もあるんですね。行けないということで止まっている調査もあるので、なので今回は、グループの中で、私がオンラインでやっているというその話をすることで、あっ、そういうふうなやり方もひょっとしたら生かせるかもしれないという面と、一方で私がうまくいっていないといところについて、皆さん、どうしましょうかというように、私も相談をしてやりとりするという、両方の面、そこをやりとりしました。

ただ、それぞれのフィールドによって、今後できそうなことというのは、やはりフィールド自体がそれぞれ違うので、必ずしも直ちにこうすればいいという話ではないのですが、ただ、私自身はやりとりをすることで少し元気になりましたし、できることから、それぞれフィールドが違うからできることが違うんですけれども、それでもそこから始めざるを得ないかなというところではあったので、恐らく、来られた方もいくらか、来たときよりも何か得られて解散されたかなというふうには見えましたので、とてもいい機会だったと思っております。

岩佐：ありがとうございました。私もそうですけれども、本当に春学期は、調査といえばZOOMでインタビューが限界で、なかなか今までのように密にいろんなものを調べることができなくなる中で、どうやってやるかという辺りは、これに関わらず、ぜひ新しいやり方みたいなのがうまく共有できてきたらいいんじゃないかと思います。どうもありがとうございました。

次は「リモート生活と家族」ということで、こちらのほうは、先ほどの話だと松本吉彦先生が仕切りでしたが、発表のほうは松田さんのほうにお願いするということでよろしいですかね。

松本（吉）：じゃあでは、最初私から少しコメントしてから、松田先生にお願いしようと思います。

岩佐：はい。

【３】リモート生活と家族

松本（吉）：この「リモート生活と家族」というテーマは、他のセッションと違って、距離が詰まっちゃってどうしようかという話をずっとしていたんですね。

岩佐：そうですね、なるほど。

松本（吉）：家族が、一緒にいなきゃいけない、または昼間地域にいること、のような話題だったのですが、具体的に何があったかは、松田先生から報告してもらいます。お願いします。

松田：はい。このグループは松本さん、私、松原先生、大野先生、森先生の５名でディスカッションしました。最初に松本さんのほうから調査のご報告をいただきまして、簡単にいうと、集合住宅の在宅ワークで生活がどう変わったかというところで、家族と過ごす時間、自由時間、睡眠時間が増えて、仕事は時間が減ったよと。家族とご飯を一緒に食べるようになったとか、帰宅時間で決まるリズムから家族で決まるリズムにシフトしたというような報告がありまして、その後、それぞれの参加者が、具体的に自分はどうだという話をしながら、ディスカッションを行っています。

例えば、私などでは、妻も働いていますので、ダブル在宅ワークという環境でいろいろ問題が生じたという話でありましたし、松原先生の場合は、夜にいろいろな会議が発生して、そこに子どもが参加したがって非常に困っているそうなんですね。大野先生は、住宅以外の場所を歩くようになったと。住宅の周りの環境がすごい大事だよねというお話もありました。

あと、森先生から、非常に興味深い話で、テレワークの話というのはマジョリティじゃないよねということ

であったり、あるいは地理的に随分違いがありますよねというような話がありました。北海道にいると、そもそも公共交通機関での移動はしないですとか、あるいはそもそも密な環境がない場所があるというような話で、そういうものかというように私も思いましたし、生活時間の変化という意味では、やはり東京中心主義で、何があっても、いろんなことで会議などでも飛行機で移動していたものが、オンラインになって非常に移動時間が圧倒的に減ったということで、生活が随分変わったというような話がありました。そんな話を中心にしながら、ディスカッションした次第です。

岩佐：はい、どうもありがとうございました。確かに他のグループは離れたものをどうつなぐかということだったんですけれども、急に密になっちゃったことをどういうふうにしていくかというのは、論点として気付きがあったと思います。あと、やはり今まで、何でもかんでもとにかく東京中心主義みたいな、何かある極があって、そこにいかにアクセスするかというものから、ちょっと違う生活の仕方であったりとか、ライフ・ワーク・スタイルみたいなのが出てくるというのは、すごく面白いですし、この辺りのテーマというのは、実は MERA でもいろんなメンバーの方も調査されていますので、松本吉彦さんもそうですし、あとはぜひ機会があれば、ここら辺で研究会ができたらいいなと私も思っています。どうもありがとうございました。

松田：ありがとうございます。

【4】オンライン講義と親密さ

岩佐：ということで、次が私ですね。「オンライン講義と親密さ」ということで、私のほうでまとめさせていただきました。

私のグループは、皆さん、大学でいろいろ講義をされている方――MERA のメンバーの皆さんもそうだと思いますが――にお集まりいただいて、まずはそのご苦労をお互いに話し合ったという形になります。情報を教えること、知識を教えることはできるのだけれども、演習的なものであったりとかやや経験知的、暗黙知的なものがやはり教えにくいなというのが、皆さんが共通で持っていらっしゃる悩みなんだろうなということが分かってきて、いろいろお互いの苦労を分かち合うような、そういう部分も多かったです。その中で、じゃあ今回は親密さというものがテーマなので、オンライン講義、教える側も相当孤独ですが、受ける側も、パチッと終わってしまうという孤独感があるという中で、どういうふうにして親密さを出していったらいいんだろうかみたいなことを、少し議論していきました。

その中で、いろいろ皆さんが工夫されていて、顔出しが有りか無しかみたいな話もありましたし、あと、授業が終わってから、お見送りといって、これは結構やっていらっしゃる方が多いようですけれども、最後までずっと残って手を振っていると。そうすると何人か残る学生がいて、話をしたりとかするとかというふうに、授業の後とか、もしくは廊下みたいな空間、教室から少し外れた場所みたいなものを、どういうふうにつくっていくのかというのが、一つの方法論としてあるなということを話し合いました。

あと一方で、実は普段少し授業に参加しづらかったハンディキャップのある人であったりとか、理解のスピードに少し課題があった人が、自分なりのスピードでできたりとかするとか、今までは学校の中だと手を上げられなかったんだけれども、ダイレクトでアクセスすることができることで積極的で、それなりに、学ぶスタンスによってはうまいこともできたりとかはしたかなというような話が出ました。

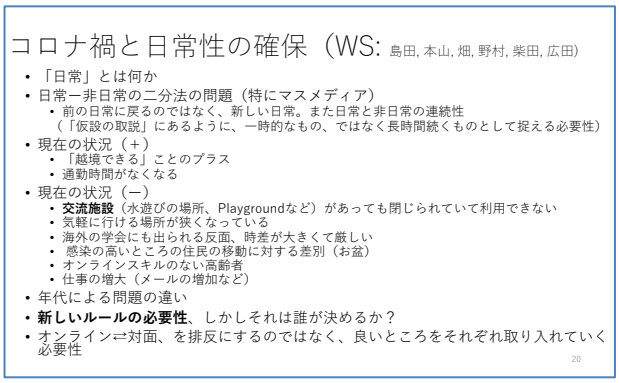
こういう議論をいろいろしている中で、そうだなと僕も納得したのは、実は我々よりも学生のほうがよっぽどデジタルネイティブで、いろんなツールを知っている。先ほどの『あつ森』もそうでしたけれども、いろんなツールを知っていて、我々が心配している以上に、彼らは彼らなりの方法で生存しているといった部分はすごくあるなという話をしていました。

その中で、実は授業とかも、自分が全てセットして学生に提供していくというよりかは、ほころびがあったほうが、例えばマイクが切れちゃったとか、断絶してしまったとかということがあったほうが、学生が助け船を出してくれて、一緒にやっている共同感みたいなものが芽生えて、むしろそのほうがよかったりとか、意外と弱さをさらすみたいなことや、学生にもっと委ねてみるみたいなことも、親密さを生む上では一つの可能性としてあるんじゃないかなというようなお話をしました。

以上です。これが「オンライン講義と親密さ」の、一応、報告になります。

じゃあ続きまして、5 番目ということで「コロナ禍での日常性確保」ということで、広田先生にお願いしたセクションですが、いかがでしょうか。

【５】コロナ禍での日常性確保



広田:はい。1枚まとめましたので、それで紹介します。

岩佐：はい、お願いします。すごい、さすが。

広田:いえいえ。何の話をしたかというと、日常性というけれども、日常って何かという話から始まって、日常と非日常を対立的に二分法でやることは、マスメディアは多いんですけれども、それはあんまりよろしくないですよねという話と、それから前の日常に戻るんじゃなくて、やっぱり新しい日常というか、もともと日常と非日常というのはある程度連続的であるべきだということと。

それから、すみません、私はまだ岩佐先生の本を読んでいないんですけれども『仮設のトリセツ』の話が出ました。

一時的なものというんじゃなくて、やっぱりある程度の時間は続くものということで、今の状況を捉える必要があるだろうという話が出てきました。

それで、現在の状況については、プラスマイナスがあるよねという話がありまして、前も出ましたが、地理的に距離がある人にとっては、逆に、例えば研究会みたいなものに気楽に出られるようになったということもあるし、お子さんのいる人なんかだと、通勤時間がなくなって、これは非常にプラスであるというのもありますが、反面、例えば交流施設とかがあったときにも、それが閉じられて使えないとか、気軽に行ける場所が狭いということもあるし、それから海外の学会に出られるけれども、逆にいうと時差が大きくて非常に難しいとかと。

それから、感染の高い所の住民がお盆に移動しようとすると、向こうから差別をされるとか、高齢者の場合はオンラインでやればいいだろうというふうに言われても、そもそもオンラインスキルがないと、それを教わりにいかなきゃいけないという話があるので、それは少し、やっぱり年代を分けて問題を考えなきゃいけないんじゃないかということと、オンラインになって、大学教員はみんなそうですけれども、仕事がすごく増えちゃったという傾向があるので、これが続くと身が持たないというのはありました。

特に、そういう意味では、今の状態を徐々に日常としてやっていくためには新しいルールが必要だろうということで、ボールドにしたところがたぶん、MERAとしては、いろいろ研究というか考えて関与していけるところかなという気がするんですね。例えば、交流施設をどういうふうに使うかというのは、ルールを決めればたぶん使い方はできると思うんですけれども、それのためにはある程度研究の蓄積が要るだろうというのはあるのと、ルールについては、役所が決めるとかじゃなくて、誰かがボトムアップで決めるほうがいいでしょう。

それで、これから日常をやるときに、でもオンラインか対面かみたいなことの話をしているんですが、それを排反していくんじゃなくて、ここはオンラインがいいけれどもこれは対面がいいと、混ぜていくことが必要だろうというような話をいたしました。以上です。

岩佐:はい、ありがとうございます。この短時間にちゃんとまとめていただいて、どうもありがとうございました。課題というのもうまく提示いただいて、今後我々がやっていくべきことがたくさんあるんだなということに気付かされました。どうもありがとうございます。

最後ですが、鈴木毅先生に「離れてつながる」というお題でお願いしていましたが、いかがでしょうか。お願いします。

【６】離れてつながる

鈴木:私のところは、石垣さんにお願いしました。午後になって全然頭が働かない状態で、いろんな話題が出たんですけれども、石垣さんにお任せします。よろしくお願いします。

石垣:はい。いろんな話題が出たんですけれども、勝手に３つにまとめました。

鈴木：さすがです。

石垣：それでまず１つ目は、鈴木先生の発表された居方というところから見てという話です。鈴木先生のお話の中では、居方がある中でばらばらなことをやっているのが良いよねということだったけれども、一方で社会としては、世の中一般的に同じことを求める人が増えてきているとかと、同調圧力がかなりあるという中で、オンラインというものを考えたときに、オンラインではばらばらな居方をするのが結構難しいのでは

ないか。だけれども、オンラインであってもいろんな選択肢を増やしていく方向に向かっていかないと、破綻していくことが多いのではないかという話がありました。そこから、今のオンラインは例えば「カメラをつけるかつけないか」とか、1 か 0 になってしまうところを、アプリケーションの力とかでもう少しグラデーションができるような技術があるといいのかな、といった展開になりました。

それから 2 つ目は「離れてつながる」の、その離れながらどうやってつながっていくかという話題です。話は大学の授業のことが多かったんですけれども、具体的には、鈴木先生の『ハチクロ』であったりとか、媒介物かませるなど、チャンネルはできるだけたくさん用意されているほうが良いということ。あと、離れてつながるときに親密さが生まれるとしたら、それは困難を共有できたときに生まれるのではないかという話がありまして。そう考えると、いろいろなことを計画し過ぎてしまうのではなくて、計画されていない理不尽さとか、そういうものがあったほうがいいのではないかという話がありました。

それから 3 点目には「離れてつながる」の、その離れたことを経験した後でどうつながっていくかという話がありました。具体的には、大学のことが出てきたんですけれども、昨日の朝日新聞で隈研吾さんが「このコロナ禍、その後の社会」といったことの取材を受けていて、そこで、「望んだ密集」と「望まれていない密集」というのがあるだろうと。「望まれていない密集」というのは、業務管理で行くオフィスとかということなんですけれども、そういった所があるとして、「望んだ密集」は例えばライブハウスとかホストクラブとかそういう話が出ました。そして「望んでいない密集」はそのあり方が変わっていくだろうと。そうすると、大学は、本来であれば人々が行きたいと望んで行く場所なので、大学は「望まれている密集」。しかし、密集するのとは違う方法があるということが、このオンライン授業などで分かったので、今後は場所に対する依存性が弱くなって、もう少しこれまでの大学とは違う展開が、面白いことが増えていくのではないかということと、またそこに臨む人の態度として、望んで来ていない人が大学にはまあまあいるので、ちゃんとやりたいことを選んで望んで来てくれる人が増えるということを期待する、というような意見もありました。

最後になってしまいましたが、メンバーは、鈴木先生、南先生、大井先生、厳先生、小松先生と石垣でした。

岩佐：ありがとうございました。大変うまくまとめていただきまして、本当に感謝します。

鈴木：パーフェクトですね。パーフェクト。

岩佐：パーフェクト。もう何も足すことはないという、鈴木先生からのお褒めの言葉を頂きましたけれども。確かに、「計画されていない理不尽さ」というのが、ある意味でキーワードかもしれませんね。今、我々が投げ込まれているのもそういう状況かもしれないし、そういう中にこそ、ユナイトの可能性というのが少しあるのではないかなという気が、私もしてきました。どうもありがとうございます。

石垣：ありがとうございます。

まとめ

岩佐：ということで、ものすごい駆け足で、一応一通り振り返りもさせていただきましたが、では最後に、今日は本当に、まずは何もできない状況から MERA として少しでもキックオフしたいということがあったので、ゴールを求めずにやった部分もあったのですけれども、最後のまとめというか総括というかを南先生のほうにお願いしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

南：はい、どうもお疲れさまです。このまとめのお話をということを岩佐先生から言われて、割と簡単に、はい、いいですよと引き受けてしまったんですが、これはなかなか大変だなというふうに、今、思っています。さっきは 6 番目の「離れてつながる」というチームに私もおりまして、計画されていない理不尽さというキーワードの話に加わっていました。これは計画されてはいたんですが、数日前にというか、おといぐらいに決まったことですから、準備とかそんなことはないし、皆さんもあらゆる面で、これは準備というよりは、今ライブで起こっているという動きなんだと思います。

まとめというふうになかなか言えなくて、だから、困ったときにどうすればいいのかということで、だいたい、今ここでやっていること、今ここを問題にせよという、そういうことが言われるんですね。だから、今ここでこうやっているということをお題にすればいいんじゃないのかなと思いました。

今日も、何回もいろんな形で出たり入ったりしながらするときに、「お久しぶりですね」というあいさつが、割といろいろ交わされていたんですね。だから、それが象徴しているかなと思いました。だから MERA の、

この5月の大会が開けなかったということで、今回こういう形を取ってみようという、これもごく最近、1カ月少々ぐらい前に決まったことでした。だからあいさつできるということは、ここで人が会っているんだと。ここというのは、だから、このオンラインのこの場ということですれども。だからこの場って人が会う場所なんだということなのかなと思います。

でも、同時に、こういう会い方ってなかなかしていないでしょうということですよね。いきなり相手の部屋の中の一番奥の書斎に、自分がぱっと入っていく。しかもそれが、何人もそういう形でということで、あらゆる人と入れ替わり立ち替わりということで、そんなふうにして相手とその場所で会うことって、これまでにないわけですから、だからそういうことでいうと、こういう会い方はこれまでしていなかったんだけれども、でも「お久しぶりですね」というふうに会って、こういうふうにして会話しているというのは、ここで人と人が会っているんだというふうにいえるだろうということですよね。

それで、先ほどの6つのグループのお話を聞いても、同じ釜の飯を食うというけれども、その同じ釜って文字通りの意味ではないという、じゃあ何なんだということがあるし、インタビューというかフィールドワークをZOOMでやれるのかといったら、これも、じゃあ普通は矛盾しているというか、フィールドって、そこの場所に行ってということがあってフィールドワークだというんだけれども、いや、それは、さっきの人と人が会うってどういうことなのかという根本に矛盾しているんじゃないのかと言われそうだけれども、それでもフィールドワークに今後なっていくんじゃないだろうか。これもクエスチョンマークというか、なるかもしれないという話だろうと思いました。

逆に、家族と過ごす時間が増えたというか、これも日本の文化でいうと、こういう向きというかこういう方向性ってなかなかなかったことが、あらゆる面でそうしなければいけないと言われていたのに、ワーク・ライフ・バランスとかと言われていたのが、ここでいきなりそういうことが起きてしまったときに、どういうふうになっているんだろうか。家族のリズムというのが中心になってきたときに、我々の生活がどうなのかというふうなこと。逆に夜の会議というので、子どもの乱入という、これもなかなかほほ笑ましいと思いますけれども、そういう出来事も起きているという。

オンライン講義に関しても、廊下という空間がオンライン上ではどうやったらできるんだろうか。さっきのお見送りという形で、最後に余韻を残すというような工夫の取り方があるんだと。これも、皆さんのそれぞれの自分の授業の中には、即生かせそうな話題だったなと思いますし、だから、その廊下という空間はどういうものなのかということが、改めてクローズアップされてきているように思います。

5番目の日常性ということで、究極は、日常性って何なんだろうという、一番根本的な問いが投げかけられていました。それで、あらゆる面に関して捉え直しということが、やりたいがということじゃなくて、やらざるを得ないというか、今日最初に私のほうからも話題というか問題を提起させていただきましたけれども、空間というか距離というのが、これまでの捉え方とどう変わりつつあるのかということ。

どこかにいるという、今も皆さんがそれぞれの場所にいらっしゃるんですけれども、こうやって一緒にいると。学会会場だと、学会会場という所に一緒にいるわけなんですけれども、どこかにいるということが、こういうふうにマルチプルにというか、同時に起きているってどういうことなんだろうか。さっきもお話ししましたけれども、人に会うというのは、今日ここで皆さんにお会いしていると、あるいは、ある方に会っているというふうに、さっきもあいさつするということで、それは我々はやっている部分があるわけなんですが、その人に会うってどういうことなのかということ。これも特に建築設計の中でということで、具体的に一緒に何かをやるということを通して、親密さということがそこで形成されるんじゃないのかというお話を今日は頂きましたけれども、何かを一緒にやるってどういうことか。我々は、ここでも一緒にやっているつもりですよね。だけれども、普段言っている形と違うから、だからそれはどういうことだろうか。

今日のテーマだった、親しくなるってどういうことなのか。これも、だから、これまでだったらこうだったんだけれども、これは親しくなったのか。あの人に会ったのかということでいうと、会っていないという、根本的に、カテゴリー的にそれを分けるという言い方があるけれども、だからそれは置き換えられないんだというふうに言いたくなる気持ちも、私も基本は持っていますけれども。にもかかわらず、親しくなるということが、少なくともMERAの今年の大会がなかったことをこういうふうにしてやるということは、これをしなかったよりは親しくなるということに関して、起

きているんじゃないのか。今日起きたんじゃないのか。皆さんが全員でということで登壇している場面もそうですし、グループに分かれて、ワークショップで参加された中で親しくなるという形で、これまでなかった関係が今日少しできているということが、もう既に起きているんじゃないのかという。

というようなことで、これらのことを、まとめられないんですが、人間・環境学会に関しては、たぶん方向というか、あらゆる問題があらゆる形であらゆる角度から投げかけられている。これは我々が発端ではなくて、社会というか、そういうことで、今日もあったんですが、世界ということがいっぺんに見えてきたというか、これまでも世界を感じるとかというのは、どこか無くはなかったはずですけれども、世界中がこの問題を共有しているということで、世界の現れ方が変わってきたんじゃないのか。その中に、人間・環境学が解くべきというか扱うべき課題が満載されているというふうに感じました。

これまでの人間・環境学、あるいは環境心理学、環境行動学の中の、例えばパーソナルスペースというふうにいわれていたことが、この空間ではどうやって、どういうふうになっているかよく分からないし、行動場面というふうにいわれていたことだって、これだって行動場面なんだといえば行動場面だろうけれども、それはどういう空間のバウンダリーを持っているのかという、そういうことにもなるし、プライバシーというふうにいわれていることも、今までのプライバシーと違うかもしれない。さっきもお話ししたように、相手の部屋の一番奥にいきなり入っていくという形で、これはプライバシーってどうなるのかというのが、どうも新しい形になりかけているし、縄張りとか領域とか、そういうことの全てで。これらは欧米の概念ですけれども、我々が日本でつくり出してきている概念でいうと、居場所という言葉で考えてきていることがあるわけですから、居場所ということも、今日もあちこちで出されました。それも、この中で、特に大学環境もそうですし、地域ということに関してもそうですし、特に高齢者とか孤立しがちな生活する場合に、居場所ってどういうふうにできるのかということ。

鈴木先生の居方ということに関しても、この中で居方ってどういうふうになり得るんだろうか。同じ方向を見るとかって、どういうことだろうかというふうな、あるいは、それぞれの居方というような、思い思いの居方というのを今ここで皆さんとしているのか、そんなふうなことで、あらゆることが問い直されてきているというふうに思いました。

もうここで終わりますけれども、最後にというか、今回のこの企画に関しては、運営委員会で議論した中で、やれるんじゃないだろうかと言い始めたところで、岩佐会長が、いや、やりましょうということで、今日も、いろいろな準備から、今日のお膳立てから、裏方作業から、全てをお引き受け願えたということで、今日こんなふうにしてできているんだなというふうに思います。

ということで、最後に、今日も話題提供の中にあったんですが、拍手するってどうやってやるのか。演劇の場合の拍手って要るんだというのがありましたので、私からのお話としては、岩佐新会長の、今回のこの場をつくり出し、また維持しということで、あらゆる面で活躍いただいたことに対して、一緒に拍手したいと思います。どうやってできるのかな。拍手をしたいと思います。ありがとうございます。以上です。（拍手）

岩佐：どうもありがとうございました。実は本当に 2 日ぐらい前にお願いするという、計画されていない理不尽にもかかわらず、素晴らしいおまとめをどうもありがとうございました。

さきほどお話があったんですけれども、実は 1 月ぐらい前に、やっぱり今回の状況に関して、MERA として、人間・環境学会として、我々のフィールドとして、できることってたくさんあるんじゃないのかなという思いをすごく持ちながらも、なかなかそういうチャンスが取れなかったんですけれども、今日はやっぱり久しぶりにお会いして、南先生のほうからも「MERA っぽい」というお言葉がありましたけれども、今我々が考えなきゃいけないこととかやるべきことというのが、実はたくさんあるし、そういう意味ですごく大変だけれども、面白い時代になってきたんじゃないかというふうに感じています。

こういうやり方なので、なかなか不手際もありましたし、せっかくみんなで集まったのに、実は名刺交換できないので、今日会った人ともう一度会えないなんていうこともあるかもしれませんが、私とか松原さん

とかに連絡していただければ、連絡先とかを取り持つことがもちろんできますし、今日この後、打ち上げはできないんですけれども、しばらくつないだままにしておきますので、もしお時間があれば、少し余韻を共有することもできればと思います。

いずれにしても、これはしばらくMERAの活動が止まっていたんですけれども、これをきっかけで、キックオフにして、12月ぐらいには大会もぜひやりたいと思っていますし、今日幾つかのディスカッションをしていく中で、これは面白そうとか、こういうのをみんなで少し話してみたいということもたくさんあったと思いますので、ぜひそういったものを拾い出しながら、しばらくオンラインという形になりますが、研究会を進めていきたいと思います。

今日はこういうのが本当に初めてで、やり方が分からなかったのですけれども、それなりにノウハウも蓄積されてきつつありますので、もしお気付きのこととかがあればお教えいただければ、次回以降ももう少しスムーズな運用等ができると思いますので、引き続きご協力いただきたいと思います。

ということで、予定よりも少しオーバーしたところもありますが、いったんこれでオンライン研究会のほうはおしまいにしたいと思います。先ほど申し上げましたとおり、しばらくつないでおきますので、もしお時間があれば、引き続き少しご討論等をいただいても構いませんということにします。どうもありがとうございました。